

入豪求法巡礼行紀

入豪雑感

シドニーは国内線乗り換えがシャトルバス接続などあって少々面倒なのだが、つい、半歳前に来たばかりだから馴れたものである（半年前はキャリオン引きずってあたりを駆け回ったけれど）。それに当地の8月とは真冬で、観光客（この頃は昔のジャップ・パッキいやJALパック様のチャイニーズ・ツアーが多い）、学生バックパッカーなどが大挙押し寄せていた2月とは余程違って閑散としている。葉月二日と云えば、日本では大暑過ぎとは云え、クソ暑い盛りだが、当たり前だが清涼としている。外気温は14℃とある。陽射しがあるだけに長袖シャツに綿チョッキ1枚の軽装だけれど、どってことはない。キャンベラはシドニーと違って内陸だから、朝晩の冷え込みは厳しいらしい。予め日本の真冬を覚悟してやって来たのだが、さほどでもないのかもしれない。何しろこの国の代名詞といえば真っ白い陽射であり、うっかりその余得を忘れていた。真夏から真冬に飛び入るとの経験はこれまでなく、なる程こう云うものかとはじめて得心がいった。やや大袈裟に云うと、火星の住人が突如地球に連れてこられたようなもので、昨日までの肌に粘り着く湿気と頭から何から溶解しそうだったあの灼熱の暑さがまるでうそごとだったように思えてならない。

Canberra 空港には Abbass 教授が出迎えに来てくれるとのこと。

これからの2ヶ月、何があるのか、知囊隆々の若い人なみに歳甲斐もなく、ややの技癢を感じていると謂ったところか。

(Aug.2.2010)

大学初日

今回の滞在先はニューサウスウェールズ大学 (University of New South Wales) at Australian Defense Force Academy (豪州防衛大学分校) で、UNSW@ADFA と表記する。UNSW のメインキャンパスはシドニーにある。1986 年に防衛大学は非軍事関係の学部教育と大学教育の基盤となる研究機能を名門の UNSW にいわば外注に出して、この一寸おもしろい形態になったと云う。ホストの Hussein Abbass 教授はじめ UNSW のアカデミックスタッフは、まずは防衛大学の学部教育の義務を担っていて、undergraduate としては cadet の学生以外を教えることが出来ない契約になっている。が、大学院教育は一般学生に開かれていて、修士や博士のフルタイムの学生は、cadet ではない (cadet や現役の士官はパートタイムの学生として研究室に所属する場合がある)。無論、研究活動も通常の大学同様である。UNSW の教授陣はシビリアンであるから、その研究は兵器その他に直接拘わるという意味では非軍事研究だけれども、多少の関わりのあるプロジェクトを扱っている人もいて、Abbass 先生もそうだがそう云う人は研究資金が潤沢で (彼の場合それだけでなく、他の対外資金もあまた獲得している)、多くのポスドク研究員を抱えている。

キャンパスをそぞろ歩くと見かけるその殆どが cadet か再教育を受けている officer であるから、三軍どれかの装束である。凛々しげに見えるのは、日本の防衛大学を訪問した折と同じ印象。勿論、ラボには私服の一般大学院生がいるが、どちらかといえば少数である。キャンパスは実に広大で、キャンベラのダウンタウンと空港の丁度中間あたりに位置する。キャンパスはシンメトリックに造られていて、メインゲートから入ってくると、正面が大学本館等の管理機能があつて、向かって右側が軍事関連の教育施設、左側が UNSW 関連施設に卒然と分けられている。UNSW サイトは Abbass 先生が属する工学及び情報学部、経済学部、理学部そしてリベラルアーツ学部の 4 学部体制になっている。

以上のくだりは、今年2月に Australia Japan Emerging Research Leaders Exchange Program で Abbass 先生の元を訪問したときに聞いたはなしでもある。

今日は初日と云うこともあつて、まずは大学での諸手続である。客員教授の ID 証、カードキーの発行やら、持ち込んだこのノート PC をオフィスで使うためのネットワークセットアップのためのサポート体制など、どれ一つとっても誠にスムーズに事が運ばれ、実によく組織化されているのに感心した。日本では7大学だとか理工系8大学 (旧七帝大プラス東工大) とか言っているいい気になっているわけだが、外国からの客人自体おそらくそう多くない (なぜなら日本が主要国であるにも不拘、非英語圏の国なので余程の物好きでない限り積極的に行ってみる気にならないのだろう…無論、(三顧の礼どころか) 殆ど大名待遇を約してようやくご降臨、いやご来駕頂く (税金使って…もとい) という例はちらほらあるわけだが、いずれにしる積極的に彼我で人的交流があるわけではない…少なくともオー

ストラリアを含む西欧圏の国々に比べ) 我らの貧寒とした受け入れ態勢など足元にも及ばない。

と持ち上げたけれど、結局、今日一日ではこのノート PC からネットワークアクセスが出来るようにはならなかった (設定のある部分が半日毎にバッチ処理されるからとの由で昼過ぎに設定を完了したが夕方までには使えるようにはならなかった)。私のオフィスは他 4 人の客員教授と相部屋で学部本館ビルにある。

今回の受け入れファンドは Australian Academy of Science (AAS) によるもので、予め AAS から Abbass 先生に手続きの書類やら小切手やらが書留で送られてきていた。滞在費は 11440 豪州ドルだから邦貨で約 100 万円がところか。2 ヶ月の滞在費としては悪くない待遇である。往復の飛行機賃は日本の学振が負担する。Abbass 先生が手配してくれたアパートは Australian National University のゲストハウスで、学外利用なので割高の 120 ドル/日である。キングサイズベットのある広々した寝室とリビングダイニング、食器、マイクロウェーブ、冷蔵庫付きキッチンに乾燥機洗濯機付き、無論、シャワートイレ付き (こっちはバスタブはホテルでも稀・・・欧州でもそうだが風呂桶につかりたいのならホリデーインやベストウエスタンなどアメリカ系のチェーンホテルにしないとなかなかお目にかかれない) で、夫婦に子供一人でも十分な広さである。週に一度の掃除、リネンサービスがある。長期滞在なら市中のアパートを探すところだが、当座の独り身には割高を入れても諸事面倒がなく都合がよい。

さて、不取敢、大学でやれることがなくなったので、午後の陽のあるうちに大学からダウンタウン近くのアパートまで歩いて帰ってみることにする。毎日往復 16 キロの自転車通勤をしていたので何かしないと身体が墮落するとの切迫感がある。と云って運動はまったくしない・・・と謂うよりも、もう体が言うことをきかないから、テニス、ゴルフから相撲までどだい出来もしない。で、当初はこっちでも自転車通勤するかと思っていたが、片道 6 キロ程度なので歩くのもわるくない。日本のように朝 4 時過ぎから夜 7 時まで大学と云う流儀は流石にこちらの人に迷惑なので、私にすると朝は非常にゆっくり目になる。時間の余裕もあるので、朝晩往復 12 キロの散歩は丁度良いのだ。

午後 4 時過ぎだが、既に斜陽である。こっちは冬なのだ。でもどうだろう。昨日も書いたが日中は陽射しがあるので、シャツ一枚でも過ごせ、せいぜい日本の 11 月の陽気といったところか。

家まで丁度 1 時間だった。さしあたり明日から徒歩通勤と云うことにしよう。往復 13 キロだから、往復 18 キロの自転車とほぼ同等の運動量だろう。こっちでの徒歩往復 1 日も日本での自転車往復 1 日と同じくカウントすることにしよう。もうこうなると健康のためなのか、単なるノルマ達成のためなのかわからなくなる。一種の病気だろうと思う。

(Aug.3.2010)

この国のこと

オーストラリアとはまか不思議な成り立ちの国である。まず、いつから国としての態を為したのかが明確でない。このことはアメリカと違って独立記念日がないことからも諒解されよう。ここがオーストラリアとの国名で呼ばれるようになったのは 20 世紀に入ってからだが、それでも完全なる主権国家なのか否かは微妙なところであった。が、少なくともそれ以前、1788 年にアーサー・フィリップ提督一行の 1000 人（よく知られるようにそのうち 3/4 が囚人とその家族だった）がシドニーにその第一歩を刻して以降 19 世紀一杯までは、夫々独立した 6 つの英国植民地として存在した。この 6 つの植民地がオーストラリア連邦を結成するのが、1901 年。実はこの段階までニュージーランドと一体化する目はあったのだが、この折にニュージーランドは連邦から脱落する。と云って豪州大陸側の各の植民地（連邦形成とともに現在の 6 州と 1 準州になる）が一枚岩だったわけでもなく、現在の西オーストラリア州は 1930 年代までしきりに連邦脱退の動きを見せるなどしていた。このころまでは、ここの住人たちは、自らをオーストラリア人と規定するより、英国人と観ていたろうと思われる。だから連邦成立のごたごたも、せいぜい出先の寓居人たちが徒党を組んで英国本国と有利に交渉する上でまとまろうじゃないかと云う程度の動機に端を発するのであって、自分たちはあくまで出稼ぎの英国人であると考えていたわけだ。例の国旗の制定は 1950 年と云うからついこのあいだのことである。国籍をもってその国民の定義とするなら、オーストラリア国民が誕生するのは、戦後 1948 年に労働党政権のチフリー首相が国籍・市民法を制定したときと云うことになる。それでもまだ曖昧さが残っていて、オーストラリア国民はみな同時に英国臣民であるとする二重国籍が、以降もなんと 1973 年まで続くのである。英国籍保持者がオーストラリアでの選挙権を完全に失ったのはロバート・ホーク政権下の 1984 年のことであった。これは何も英国と豪州が垂直的片務関係になっていただけではなく、それまでドミニオンとよばれた豪州、ニュージーランド、カナダでは有権者が英連邦内で投票する権利を相互に認めていただけのことである。これは、英国系白人植民者には英帝国及び世界中至る所にあった英連邦内を自由に移動し、職に就き、政治に参加するのを当然の権利として認められていたからである。そうは云っても両大戦を劃期に徐々にオーストラリア人としてのアイデンティティが形成されていく（これにまつわる色々なはなしがあつて、日本の存在もその歴史に小さくない影響を与えているのだが・・・）。いずれにしろ、この頃、つまり 1970 年代から 80 年代までのオーストラリアと云うのは、よく知られている白豪主義のオーストラリアであつて、国民とは白人のことであり、非白人はごくごく例外のマイノリティであり、もっと云うと正統筋目の英国系住民だけがある意味で真正のオーストラリア人だったわけだ。このことは、先住民アボリジニがオーストラリア国民として認められ、正式に国籍を付与されたのが実に 1967 年だったと云うことかも諒解されよう。アメリカの公民権闘争でさえ 1950 年代のことだった。国籍すら

ない彼らは人であって人でないと云うことだったのだろうか。それとも人間以下の存在と観ていたのだろうか。人種差別もへったくれもない。それ以前の問題である。流石に（當時は）世界最先鋭の人種差別政策国家だけのことはある。どうも了見がしれない。

無論、今はその欠片もない。

道を歩いていても多くの東南アジア系、中国系、中東系の顔かお貌であふれている。現在、アジア系だけで人口比の7%を超えていると云う。かつて白豪主義を標榜したこの国も80年代を潮目に多文化主義へと舵を切り替え、以降、社会に急激な変化が起きているわけだ。アメリカ、ヨーロッパや日本にひけを取らない豊かさと英語を母語とする西欧世界の一角にありながら、移民への障壁が低い、特に技術学芸等の特殊な才能に秀でた人々は優先的に受け入れられてきたから、アジアの人々にとって、就中、有為な若者にとっては強烈な吸引力として作用してきたわけだ。

ADFAでもcadetやofficerは白人が多いように見えるけれど、大学院生やポスドクの多くはパキスタン、中近東、中国、ベトナム出身者で占められている。Abbass教授も元エジプトからの留学生である。この多様性が国益にもかなう、否、白人至上主義が、南アを例に取るまでもなく国益を著しく阻害するとの意志決定がなされた結果なのだが、おそらくは白人社会にとっては苦渋の末だったのだろうとも忖度される。多文化主義とは如何にも聞こえはよいが、いろいろな意味で社会的不安定要素をも惹起せずには措かない（今のところマジョリティは英国系白人だから大きな問題にはなっていないだけのこと）。ベトナム戦争前後の東南アジア諸国、特にインドネシアとの摩擦関係も多文化主義に切り替えざるを得なかった理由の一端にある——余談ながらADFAのリベラルアーツ学部には歴史学、言語学その他の学科に並んでインドネシア学科と云うのがある……横須賀は走水の我が防衛大学に（あからさまに）中国研究専科なんぞこしらえようもんなら朝日を筆頭に進歩派が、そら昔の“シナ屋”（旧参謀本部にいた中国関係を専門とする少壮陸軍軍官僚）復活かどぎゃんぎゃ騒いで（ありもしないことで騒ぎまわるのは例の教科書誤報事件をひくまでもなく朝日の得意ワザ）かの国にご注進に及ぶこと必定で実現可能性ゼロ——。

人々を引き寄せる力が国力の全てではなかろうが、今日日、日本にどれだけの吸引力があるだろうか。言語障壁は普遍性を競う場ではどうしても足枷になる（だからどう逆立ちしても日本の大学教育が英語圏のそれと競争して勝てるわけがない……阿呆な考えは早く諦めるべきだ）。ジャパニアズナンバーワンと持ち上げられた頃の経済的磁力、社会システムの巧緻さ堅牢さも翳ってきてはいまいか。蓋し、我ら日本人は日本と云う閉空間の中で今のところの豊かさを享受している——偷安の快を貪っている——わけだが、これがいつまで続くのだろうか……フットボールコートが二面は入ろうかと云う青芝がきれいに刈り込まれたパレードモールに長い影が落ち始め、あたりは急に寒くなってきた。

(Aug.4.2010)

御輿に乗る人担ぐ人

到着 4 日目だが、Hussein が共同研究のキックオフミーティングをしようと言う。木曜の午後 3 時に彼の部屋に招集をかけられたのは、彼の同僚の Michael Barlow 博士、ポスドク研究員の Kamran Shafi 博士と Weicai Zhong 博士。Karman と Weicai は Hussein とは雇用者—被雇用者の関係にあるわけだ。Hussein は多くの外部資金を獲得しており、同時に多くのポスドク研究員をスタッフとして抱えている。彼とポスドクたちの関係は平たく言えば鶴匠と鶴のそれであり、さらに鶴の配下に PhD 学生、一部にマスターの学生がいて、間接制御を導入しつつ全てを Hussein 一人で掌握するピラミッド構造になっているようだ。講座や我々が言う研究室の概念が多くの西欧圏の大学にはない。大学での昇任、tenure (永久就職権)、ポスト、資金など全てが過酷な競争に晒され、優勝劣敗がきわめて明確にバイナリー化されている。勝者は多くの研究資金を得、多くのスタッフを抱え、結果として多くの成果を上げるから、更なるバイナリー化がすすむとの循環で、まさに Winner takes all。どこでもヒキや人脈、学閥、閥閥そのたのコネはあるだろう。それでもエジプトからの元留学生の彼をして今の地位をなさしめているのは、Hussein の能力が尋常一様でないからだろうと思う。

Michael Barlow 博士のニックネームはなぜか Spike という。彼曰く、表記上は Michael を通常 Mike とつぼめて言うが、更にこれが音便で Spike になったことと、その昔のワーナーブラザーズのアニメキャラクターに彼と性格が似ている犬 (?) が登場したそうで、その名が Spike だったそう。彼は ADFA の専任首席講師で、大学院生の指導資格もある。外部資金その他のアクティビティを総じて Hussein ほどでなければラボを持たない (つまりポスドクは自前で抱えていない) 彼のような立場になる。Professor という肩書きはないが、Hussein とは同僚関係である。以前、NTT の武蔵野中央研究所にいたことがあるとの由。

Kamran はパキスタンの人。学部を終えた後、シドニーにある UNSW メインキャンパスで情報学の修士をとり、一旦帰国、日本の東洋プラント設計の現地法人でコミッションングの仕事をしたり、大学で 1 年間時間講師をしたのち、またこちらにやってきて classifier システム関連の学位論文を ADFA でまとめ、その後ポスドク研究員になったという。企業経験やいろいろな大学を渡り歩いていることもあって AI 全般に通じている。奥方と 3 人の子持ち。彼の知的な風貌から諾なるかなと思ったが、細君は (おそらくパキスタンでもお医者さんだったのだろうが) いま丁度こちらの医学部のインターンの最終期間だそうで、年取った両親のことが気になるが、当分は国に帰ることはなさそうだと言う。

Weicai は昨年 7 月に来たばかりの新米ポスドク。来豪前は西安情報工科大学で学位取得後、SPSS の中国現地法人に勤務してデータマイニングの研究をしていたとのこと。西安情報工大最年少のフルタイムプロフェッサーになった彼の細君が、中国の大学環境に嫌気がさし、休職して ADFA にポスドク研究員に雇われてきたのを追かけてきたらしい。5 歳になる男の子がいる。

分野にもよるのだろうが、このように学位取得前後、ポスドク経験を積む課程で、いろいろな研究プロジェクトに参画することによって、スキルを広め、かつ深めていくのが一般的である。日本のように修士博士以降とずっと同じことやってますってのは、まずお目にかからない。彼らは二人とも、元々進化ゲームを専門に学位を取ったわけではない。かと云って底が浅いわけではないのだ。

嗟嘆して思うのだが、彼ら二人の既往や家族構成を訊くにつれ、アジアの多くの国の知的才能に秀でた若い人たちは、こうして西欧圏に出ていき、進んで自らの可能性を試している。Hussein もそうだが、そのままその国の構成員になってしまう場合もあるだろう。しかし、日本人はあまり見かけない。豊かになったおかげで、ドミニカの若者たちが自らの野球の才能だけをたのみにメジャー目指して米国にやってきたインセンティブのごときものは、日本の知性秀でた若者には既に存在しないということか。過去の先達たちをみても、少しの例外を除けば、たとえ若いうちに欧米で勉強して、確固たる地歩を築き上げたとしても、——我ら日本に住む者にしてみるとありがたいことに——多くは結局日本に帰ってきているように思われるから、豊かさ云々はそもそも日本人が海外で勉強する動機としては、いまもかつても薄弱だったように思われる。じゃどうして日本の若者を見かけないのか？まさか、日本の大学の教育や研究の水準からして、ことさら海外に行って学ぶ要がなくなったからか？それは嘘だろう。国自体が下り基調で自閉的になりつつあるのと因果があるのだろうか。自国に閉じこもって、じゃあ自省的にその知囊が自らの理解に向いているかと云えば、これも怪しい。若い人と話していてもまず感じるのは、系統的な読書経験の失落であり、自国の文化や歴史に関する好奇心なり知識が驚くほど浅いことだ。一体どこにその知的エネルギーは蕩尽されているのだ？ゲームやアニメか・・・寂として言葉なし。

Hussein の私室にある打合せテーブルで、大学での講義負担の多寡が彼我でどうか、とのたわいのない雑談で打合せは始まったが、互いにどんな興味があつてどこで重なりそうかとのブレインストーミングとなり、しまいには議論は白熱した。

わたしは、現下、ネットワーク上の進化ゲームにおける **network reciprocity**——ネットワーク互惠の本質が何なのかに並々ならぬ関心を持っている。放っておくと裏切り合いになってしまうジレンマゲームにどんな付加的枠組みを持ち込むと協調的均衡にたどり着けるかを考えるのが進化ゲーム理論だ。その肝心の要を丸めて云うと、ゲームの対戦相手（社会的相互作用や生物システムであれば種内関係、種外の共生関係の比喻になっている）の匿名性をどうやって減じるかにある。どこの馬の骨とも知れない一見さんとやり合う（これを **well-mixed** という）のではなく、同じ相手と繰り返し対戦するなら、ジレンマゲームの局面で互いに相手を出し抜いて貪ってやろうとするより、相互に協調的に振る舞う方が双方の期待利得は高くなる。つまり、相手に歩み寄って協調的戦略をとってやっても、相手は自分を出し抜かず、同じように協調的に応じてくれるだろうと期待される。なぜなら同じ相手と繰り返し対戦するから、貪りによって一時的に荒稼ぎしても結局、双方が裏切

り合いの応酬（囚人のジレンマゲームではこの状況がいわゆる Nash 均衡）にトラップされ低利得しか上げられない状況に陥るわけで、それよりは相互に協調的に振る舞った方がマシだからだ。これを直接互惠（direct reciprocity）という。生物学、物理学、情報学のサークルでこれまで様々考えられてきたこの「匿名性を減らす」プロトコルは、実はいずれも 5 つに類別でき、幾つかの前提を構えれば、全て同形式の単純な構造式で表記できる、との画期的理論を Harvard 大の Nowak が 2006 年に Science に発表した。その構造式は、ジレンマの強さと夫々のプロトコルを導入することにより減らすことが出来る匿名性の程度との単純な不等関係で表され、その不等式が満たされるとき協調が進化するという。驚くべきことに、この不等式は、社会性昆虫とよばれる蜂や蟻と云った膜翅目がどうして他利行動（働き蜂や働き蟻はしばしば我が身を犠牲にしてまで社稷であるコロニーを防衛する）を進化させることが出来たのかを証明した Hamilton の包括血縁度に関する不等式（1965 年に Journal of Theoretical Biology で発表された——Hamilton は夭折してしまっただが生きていれば確実にノーベル賞を受賞したろうと云われる生物学者）と全く同型であることを Nowak は演繹的に証明している。みな彼の緻密な数学力に脱帽するとともに、自然界の原理は、人間社会システムを含め、極めて単純な構造原理によっているとの美しさを改めて確認させられたわけだ。

この 5 つのプロトコル中のネットワーク互惠に関する上記の不等式は、ゲームのジレンマ強さとネットワークの平均次数（ノードが平均何本のリンクをもつか——人間社会システムに準えていうと平均何人の知り合いがいるか）だけで表記できるという。曰く、平均次数が小さければ小さいほど大きなジレンマ下でも協調は進化できるというもので、ネットワークのトポロジーには一切関係ないというのだ（平均次数が大きくなることは極限では前記した well-mixed になるので、メノコの議論として方向性——つまり次数大ほど協調は進化できない——は首肯できる）。もっと踏み込んでいうと、ネットワーク互惠は平均次数だけで決まる、すなわち network reciprocity の本質とは平均次数である、と言っているわけだ。それまで、ヤッコウ（「やったらこうなりました」実験レポートだけを旨とする低級研究者——斯く申すわたしもそれ）連中が、よってたかつて規則的ネットワークであるリングやら格子やらでシミュレーションをカマし、次いでヘテロなネットワークであるスモールワールドやスケールフリーグラフを試したあげく、どうも協調にはグラフのヘテロネスが重要で、スケールフリー上では大きな協調創発効果が観察できると主張してきたストリームに驚天動地のインパクトを与えた。勿論、Nowak の演繹には前提があるので、全ての場合について、トポロジーはマイナー要因で、平均次数だけが主要因子であると言っているわけではないのだが、そのような誤解を招きやすいような主張を取って Nowak はしてきたようにも見える——その方が、自然の原理は単純で美しいとの大きなストーリーに沿いやすいので。いずれにしろ、現下、物理学者や数理生物学者で演繹の馬力にすぐれた理論家とヤッコウ含むシミュレーション屋が入り乱れて、何がネットワーク互惠の本質なのかについて、学会は喧々諤々の、上へ下への、ほとんどカオスの状況にあるのだ。この図を

大きく言えば、ヨーロッパ中心の物理学のグループ、Nowak を中心とするアメリカの生物学のグループ、加えて質量ともに近年とみに隆盛著しい中国のグループがあって、特に第三局には数多くのヤッコウもいる。兎に角、この分野の論文ときたら、主要ジャーナルに週に何本も新しいのが出てくるので、フォローするのが大変である。ただし、玉石混淆なのだけれど…。

今年 3 月修了した山内敦雄くんの修士論文は、平均次数、グラフポロジジーその他ネットワーク上の進化ゲームで考えられる要因を全て言挙げし、悉皆的な完全要因実験をしたもので、その内容前半部分は既に **BioSystems** に掲載予定になっている。ネットワーク互恵について幾つかの新しいことがわかったが、その最大のポイントは平均次数の要因効果は寧ろマイナーで、それよりも協調か裏切りかの手（戦略）をアップデートする方法やそのタイミングをどんな方法によっているかの方が遙かに影響が大きいとの点である。平均次数が小さい方がネットワーク互恵は大きくなるとの Nowak の主張も、グラフポロジジーや上記のアップデートに関する仮定によっては逆になる場合もあることがわかった。

Hussein は情報学の人であるから、物理学や生物学で繰り広げられてきた如上の論争から一寸距離があった。彼のゲームへの興味は人間社会システムの情報フローと云う大きな枠組み中の視座に依拠する。それもあってか、彼のネットワークゲームのモデルはエージェントにメモリーが仕込んであったり、と一寸風変わりなものであった。が、彼も何がサイエンスとしてホットなのかの嗅覚は人並み外れて鋭いので、一部の研究成果を物理学のハイクオリティジャーナルに投稿してみたそう。Physical Review E はゲームとネットワークに関する議論の総本山の一つである。が、あえなく査読にまわる前のエディターによるスクリーニングで落とされたとのこと。曰く、ここでのコラボの成果は、クソ物理学サークルを見返してやる「強い」論文に一丁仕立ててやろうじゃないの、とのジョークを飛ばす。

彼のネットワーク研究への造詣は深く、とくにモチーフとよばれるトポロジジーの基盤構成単位に着目したすぐれた論文を IEEE Transaction に数多く発表している。3 節点のモチーフを考える。一つは鎖状に並んだタイプ、今ひとつは三角形を構成するタイプ。ネットワーク上で囚人ジレンマゲームを行うとき、この 2 つのモチーフが存在することが、協調が進化するための必要条件であることは容易に証明できるのだが、彼は、この 2 つのモチーフのネットワーク中の存在比がネットワーク互恵の本質ではないかと主張し始めた。5 人の議論が激してくると、互いにホワイトボードのマーカーを奪い合いながらの応酬になる。そうなる口が纏れて、ときに彼らが何を言っているのか聞き取れなくなるわたしは常に後塵を拝して後手にまわらざるをえず、そんなとき Hussein は「マジ、通じてる？ (Honestly understood?)」と言う。彼のアイデアが問題外の可能性もあるかもしれないが、おもしろい思いつきではある。一寸観、すぐには反例を上げられない。試してみる価値はありそうだ。少なくとも、2 つのモチーフの存在比の影響が、山内くんの結果におけるトポロジジーや平均次数の要因効果よりも遙かに大きいならば、アップデート法の影響は措くとしても、トポロジジーの影響はグラフの次数分布や平均次数、次数相関、クラスター係数、平均パス長

なんぞの既往のネットワークパラメータでなくて、彼言うモチーフ存在比なのだ、と云う全く新たな主張は出来そうである。

よし、じゃあ、プレテストのシミュレーションだ、と云う段になった。

Hussein はにこやかに Weicai と Karman を振り返る。

「まず、2つのモチーフの存在比をパラメータに、有限個のモチーフを生成させる。次にそれをランダムに繋いで一つのネットワークにする。総節点数と総リンク数は拘束しておくので、最後の方の接続は探索問題になる。単純な山登り方ですればいいさ。いずれにしろ、いまある C++ のモジュールを細工すれば出来るだろ？ねっ Karman？」

「その上でゲームをするが、アップデート法その他の要因および水準割りは Jun がメールしてくれるっていう論文原稿（山内クンの修論後半のジャーナル投稿原稿）を真似ることにしよう。いいね Weicai？」

二人ともボスの新たなミッションに神妙にうなずいている。

「予備シミュレーションの結果だけどいつまでに俺たちに見せてくれる？週末までか？」

「先生、今日は木曜日で、週末までといえば明日迄ってことで、それはチト・・・」と Karman。

「じゃあ、週明けだな」と Weicai をみる Hussein。Weicai しばし言葉なく、「もう一声」と絞り出す。

結局、次の水曜日の午後イチに次回打合せをすることで散会となった。しめて 2 時間。非常に効率的な研究の進め方だと感心したのと、彼とポスドクとの非対称な垂直関係を垣間見た気がしてなかなか興味深かった。頗使しているとはいわぬが、鶴匠と鶴——もとい、雇用者と被雇用者のシビアな関係に、なるほどなあと思ったわけだ。わたしが西欧流の契約社会とはことなる異邦人（殆ど異星人）で、その上、日本の大学という最も社会的契約システムの慣行から遠いサンクチュアリからやってきたからだろうか。否、そうでもあるまい。M 先生を筆頭に、ドが 5 つぐらいつきそうな純日本風コテコテ系（単に海外では通用しないとの意味）の大学人でも、人使いの荒さにかけては人後に落ちないのをよく観るわけだから・・・。もっとも彼らの粗っぽい人使いは契約云々でなく、単なるパーソナリティから来ているのだと思うが。

言うまでもないことだが、御輿に乗る人にそれなりのアイデアあってこそその担ぐ人々への的確な下令なのである。諸事これがこちらの流儀なのである。

(Aug.9.2010)

朝靄の中で

荏苒として日を送って既に一週間、日常と云える生活循環がようやく見え始めた頃か。朝は遅い。

それでも7時には家を出て大学に向かう。片道1時間の路行きである。暁闇の地平から湧き出してばかりだから、朝陽は綺羅を放つばかりで力がない。

ダウンタウンの中心には City Hill とよばれる半径1キロたらずの大築山があるが、その木立を突き抜けて行く。

朝露が霜となった芝草は灰かに白く濡れている。

それを踏みしだいて歩をすすめると、しまいに街区は尽きて、広々とした住宅が建並ぶ一郭になる。いかな人煙希薄な国柄の、人工都市のこととはいえ、かりにも首都のまち中ど真ん中にある住宅地である。それなりのもの——不動産価値——なのだろうが、例えば東京の番町だとか、ワシントンDCのジョージタウンにあるような戸建て住宅ほど御屋敷然とはしていない。なにしろ、広域まで掻き集めてもたった30万人しか住んでいない「首都」なのだ。この中心界限だって、まかり間違えば春日や大野城と同じ規模に見えてしまう。少なくともかつて暮らした Denver よりは一桁か二桁は田舎だと言える。そんな、おそらくアップーミドルくらいが棲む、それなりだろうけど普通の住宅地なのだが、どうだろう。一筆で200坪か300坪くらいはあろうか。いまさら彼我の落差をここで嗟嘆したとて致し方ないのだけれど、なんたる余剰か。

直路(ひたみち)な並木道を Anzac Parade (ANZAK 大通り。Capital Hill と戦争記念館を結ぶこの都市の第2軸線、都大路のようなもの。今ひとつの軸線は Capital Hill と先の City Hill を結ぶ)まで約1キロを跋涉する。ブロックが切れる辻々には、ここの住民用なのだろうが、見事に手入れされた芝生のラグビー場やテニスコートがある。

そのテニスコートでは、小学校高学年くらいの金髪を引っ詰めた少女とその親父さん、兄さんと思わしき三人組がいつも決まって早朝練習をしているのだ。蓋し、非凡の才を家族ぐるみで伸ばしてやろう、ことによると古くはカリーン・バセット、リサ・ボンダー、今様ではマリア・シャラポアのようなスタープレーヤーになるやもしれない、との期待込めての寒稽古なのだろう。微笑ましくも、熱の入った打ち込み様に、なるほど本気だなと思った次第。意地悪く半畳入れるなら、才能もあろうが、この恵まれた環境があつてこそ、そう云った連中が出てくるのだろうとも思うけれど。元々テニスなど宮廷スポーツだったのだから(近代テニスの歴史は浅くて高々19世紀後半に遡及するだけらしい)、まあ当然の成り行きなのか。スラム街から出てくるのはボクシングのチャンプが似合いで、テニスコートや銀盤の妖精など出てくる筈はなく、俚言に言う「掃き溜めに鶴」はいなことになっているのだろう。

しかし、今日はその親子三人がいないのだ。

おととい昨日と雨続きで底冷えのする朝だったから、暫くお休みということにしたのだろうか。それとも、親父と兄貴のいけずなしごきにいたいけな少女が拗ねてしまったのか。あるいは風邪でもひいたか。

主のない芝生のコートには黄色い庭球が一つ二つ寂しく転がっている。

歩みを止めて暫しだれもない朝靄のコートを眺めてみる。

先を急ぐ路行きではないのだ。

たまには立ち止まって、ゆっくり周りを眺め、自分のよって立っている大地を觀、自省する時間があるってよい。

するとどうだろう。

向こうから三人組の声がしてきた。三人が三人とも真っ白い装束に身を固め、少女はしゃもじの化け物を元気よく振り回しながら先頭を小走りに、介添えの兩人は一杯に鞆を詰め込んだ籠を両手に、ややおくれてついて来る。

安堵のせいかな、ふと吐き出した息が白かった。

彼らも自分たちを觀て微笑している見知らぬ東洋人を気色悪く思ったにちがいない。

すれ違いざま目が合うと、互いに笑みを交わし、good morning と声を掛け合う。

今日はいいい日になるだろう。

街路樹の間から斜に射していた朝陽が、急に輝きをまして、コートに掛けられていた朝靄の覆いを振り払う。

それを見届けると、わたしは前を向いてまた歩き始めた。

(Aug.15.2010)

オーストラリア戦争記念館

通学途上の丁度中間点、Anzac Parade のどん詰まり、人造湖 Lake Burley Griffin の向こうある議事堂界隈の Capital Hill から眺めると丁度 View Stop の位置にあるのが Australian War Memorial だ。觀るものも盛り場もほとんどない Canberra の数少ない観光スポットになっているから、日本人のツアー客も必ず連れてこられる。——こられる——などと持って回った言い方をしたのは、南京大虐殺記念館や盧溝橋抗日記念館ほどのどぎつさ（あるいは嘘八百の絵空ごと）はないにしろ、日本人としては見たくない、こっちの人としては是非とも見せたい展示がされているからだ。戦争は勝者にしてはじめて語り得るもので、敗者はねつ造であろうと歪曲であろうと勝者が語る「歴史」を黙って聞くしかないのだ。ましてや相手の国の中のことだもの・・・この展示おかしいなどと言えた義理ではないのだろう。国立施設だからか木戸銭とらないのは、モールにあるスミソニアンに如し。

ADFA でも不思議に思ったのだが、この記念館の前にオーストラリアの国旗と並んでトルコの国旗が掲げられている。ADFA のパレードモールにはトルコを筆頭にオランダその他の国々の旗が林立している。普通ああ云った掲揚国旗ってのは、その国と同盟関係にある国の旗（ブリュッセルにある EU 本部前を想像するとよい）が打ち立てられているものだろうに、なぜだと Hussein に訊くと、オーストラリアが戦（いくさ）にでかけて犠牲者が出た戦場の国旗をああして掲げているらしい（彼もエジプト出身で、かつ自分は、歴史は一寸苦

手で・・・などと言っているの、そう詳しくないのだ)との言。それで納得した。宗主国の英国は別にして、かつてオーストラリアと防衛上の同盟関係にあったのは Anzac——Australian and New Zealand Army Corps——からも諒解されるようにニュージーランドだけのはずで、トルコやオランダが同盟国だった筈はない。

この国では4月25日は国民の祝日 Anzac Day になっている。毎年、この Memorial 前では盛大なパレードが行われる。これ、日本で云えば終戦記念日や原爆忌と同じ感覚だ。そのナイーブさ加減も似ている。第一次大戦——余談ながら西欧では The Great War とは、第二次大戦でなく第一次大戦を指す——英国の要請に応じ、オーストラリアとニュージーランドは Anzac 軍を編成、1915年4月25日にトルコのガリポリ半島に強襲上陸作戦を敢行するが失敗する。同年12月に撤退するまでに延べ戦死8千余名、戦傷1万8千人の犠牲を被った痛み（サイパンと硫黄島の玉砕では夫々3万余、1万8千余名が戦死している）をしのいで Anzac Day が制定された経緯がある。従って、この国では自国の拘わった会戦のなかで最大の犠牲を出したガリポリ戦役がもっとも大きな歴史的意味を持つわけで、ADFA のトルコ国旗となるわけだ。それにしても戦地の国の旗を立てるとの感覚はよくわからない——人殺しに出掛けて、その押し込み先「征伐」リストを得々と掲げているようなもので、そもそも誇るべきものなのかと思うが、如何なものであろう。道場荒らしが他流試合に勝つと相手道場の看板をかつさらっていき、自道場の羽目板の上に掲げるあの習わしと同じと思えばよいのか。それにしても了見がわからない(戦争記念館前のトルコ国旗は Kemal Ataturk Memorial のそれであった。ガリポリ戦役におけるトルコ側の現場指揮官はのち建国の父とたたえられ、初代大統領になるケマル・アタチュルクであった。礎石には奮戦した両軍兵士への讃があった。恩讐を超えて、と云うところか)。

Memorial の展示は、大英帝国の植民地時代からこの大陸の人々が拘わった対外戦争(云うまでもなく自国が戦場になったことはない——厳密に云うと第二次大戦で帝国海軍によりポートダーウィーンが爆撃され、シドニー湾に魚雷をうちこまれたことがあるが——)を網羅している。19世紀後半のマフディー戦争(スーダン戦役;エジプトからスーダンにかけての植民地支配を完成させるため英国が殆ど丸腰の原住民相手に仕掛けた戦い)、ボーア戦争(第2ボーア戦争(1899-1902年);南アで金鉱脈の利権を巡ってオランダ系住民と英国系住民が衝突し英国がこれに介入)と云った英国の植民地戦争から、両大戦、そして朝鮮戦争、ベトナム戦争まで、いずれも余所に出かけて行ってオーストラリアがどれだけ勇ましく戦ってきたかを喧伝している。中でもジオラマといい、実物展示といい、絵画と云い、もっとも熱っぽくディスプレイされているのが上記のガリポリ戦役というわけだ。第二次大戦の展示も勿論大きなスペースを占めていて、中でも日本と太平洋で干戈を交えたくんだり(日本にとっての主敵はあくまでアメリカだったわけだが、あちらさんとしては悪しきジャップを成敗したのは俺たちであるとの語り口になる)は、こちらとしては見るに忍びないものも少なくない。鹵獲された零戦が天井から釣り下げられて晒しものになっているのはご愛敬としても、捕虜収容所で日本の民間人に斬首される直前の豪州兵捕虜の

手記や写真が展示されているのは誠にいたたまれなくなった。高齢者のボランティア（ことによるとベトナム戦争のベテランかなんかなのかも知れない）が30分ごとにツアーをしていて、よるとはなしに彼の説明を聞くと、シンガポール陥落時（1942年2月15日；日本側にするとコタバル上陸に始まる馬來（マレー）作戦の掉尾を飾るハイライトだった）に豪州人看護婦22人が日本軍に虐殺されたくだりを20人くらいの聴衆を前に講釈師ばりの身振り手振りで語っている。明らかに作り事とわかる写真を見せながら30万人虐殺されたなどと言っているのではない。虐殺も斬首もたぶん本当にあったことなのだろう。確かに、日本は先の大戦で没義道を多く働いた。欧米の尻馬に乗って中国の利権漁りに割り込んでいっては恒常的な侵略をなし、周縁国に土足で踏み込むばかりか、最後は世界中の国を向こうに回して戦争すると云う殆ど狂人ですら為しえないような愚かなことをしたわけだ。それでも、ことそこに至るにはそれなりの理由があったのだ（戦後主義的価値観の中ではそれを考え、教え、発するには勇気が要ったし白眼視もされた——いまだにその自縛から抜けられない）。少なくとも（健康なナショナリストの）日本人ならば、そう云う立場を取りたいと考える。それに、彼らに少しの野蛮がなかったわけではあるまい（もちろんだからと云って、斬首や非戦闘員の虐殺が免罪されるわけではないのだが・・・）。彼らのお友だちアメリカは無辜の市民10万人を瞬時に焼き殺しておいて（それも念の入ったことに、一度ならず二度までも）、和平のためには致し方なかったと言い張って悔いるところがない。そうだろう。彼らの感覚にすれば日本人は人間でなかったろうから（今もそうかも知れない）。東京裁判のウェブ裁判長（豪州人）は、法律家でありながら、文明と正義の名を借りて復讐のための茶番を繰り広げて、恬と恥じるところがなかった。難じているのではない。それが戦争と云う人間の最も野蛮な営みの実相だと言いたいのだ。だから、勝者が自らに正義ありとの高見にたつて、戦争を論じること自体そもそも不遜な振る舞いなのではないかと申し上げたいのだ。まっ、こんなところで、一人おだを上げてても仕方がないことなのだけれど・・・。

さて、出口の手前には、余所の博物館、美術館と同じように土産物屋がある。

戦争記念館のそれでは、一体、何を売ってんだらう・・・まさか横須賀ドブ板のショップのように進駐軍——もとい・・・今は駐留米軍ですか——の放出物資ではあるまいに（ちなみに豪州は米国の同盟国（米豪ニュージーランドの同盟をANZUSと云う）ではあっても属国ではないので駐留米軍はいない）。観ると絵はがき、マグネット、Tシャツの類で美術館、博物館と大差ない。いささか異なるものも置いてある。飛行機や船の模型、プラモデルだ。あれ・・・見ると日本語のパッケージがある。「オーストラリア海軍駆逐艦バンパイア；1/700」とある。1917年に就役、英国から譲渡された1479トンのアドミラルティVクラスの駆逐艦だ。太平洋戦争劈頭、英国東洋艦隊の戦艦プリンスオブウェールズ、重巡洋艦レパルスが帝国海軍航空隊に撃沈された折、乗員を救助。しかし、4ヶ月後に生起したセイロン沖海戦で海軍機動部隊の艦載機に撃沈されてしまう（1942年4月9日）。いずれにしろ帝国海軍との関わりが深い船なので、日本でプラモデル化されているわけだ（ちなみに2代目バンパ

イアは 1959 年就役の駆逐艦で今はシドニーにある海洋博物館に係留されている)。タミヤ製、邦貨 1000 円くらいだったか。みると 33 ドルとあるから、倍以上になっている勘定だ。どうしてそんなに詳しいか？それは、同じものを購入して、Hussein への土産にしたからなのだ。彼の部屋にはイージス艦のポスターが壁一面に貼られていたから、勝手に戦艦オタクだろうと踏んだわけだ。もちろん我が手になる額入り水彩画など、他のまともな(?)土産も持って参じたけれど……。初日、土産物を広げて彼と秘書の Fiona にお披露目した折、彼女がこのプラモデル見て大笑いした。Hussein が箱を空けて中身を見ると、部品のこまいこと、小さいこと。なにしろ 1/700 だ。彼女曰く、忙しい先生には therapeutic としてはもってこいね……。当の Hussein は、英語の設計図と部品を引き比べながら、これ、完成させるのにどのくらい時間かかるんだろうね、とぼやきながらも満更でもなさそうであった。

(Aug.20.2010)

ある朝に

生活習慣とは、枕が変わろうと、水が変わろうと、容易にはかえられないものらしい。この一、二年、些か度が過ぎた早寝早起きになっている。こちらに来て、時間に余裕のある生活になったせいも、やや緩和されたけれど、それでも朝 5 時前には起きてしまう。無論、あたりは真っ暗である。城山三郎の『毎日が日曜日』ではないけれど、こちらに来て曜日の感覚がすっかりなくなっている。

夜が明けるのを待って、朝食のサンドイッチとお茶を背囊に詰めて、散歩に出かける。

キャンベラはよく知られるように人工的に造られたまちだ。1901 年にオーストラリア連邦が成立する折、首都をビクトリア州のメルボルンにするかニューサウスウェールズ州のシドニーにするかで両市が激しく対立。結局、調整がつかず、いっそ新しいまちをその中間に造っちまえとのことで 1911 年に建設が始まった(完成したのが 1960 年——ついこの前のことだ)。上越新幹線の駅を燕市に建設するか、三条市につくるか、場所が決まったら今度は駅名をどうするかで揉めに揉め、最後は田中角栄が仲裁に入って、駅名は「燕三条」に、駅の登記上の所在地は三条市にする、との妥協(如何にも角さんの裁きらしいオチだ)が図られたエピソードを思い出す。米人ウォルター・バーリー・グリフィンが都市計画の縄張りをした。まちは彼の名から付けられた人工湖バーリー・グリフィン湖(Lake Burley Griffin)を中心に、南側が国会議事堂(Capital Hill)、連邦政府諸官衙、列国の大使館が配され、北側が City Hill を取り巻いて業務地区、住宅街などが広がる。City Hill と Capital Hill を結ぶ Commonwealth Ave、これと軸対称に Kings Ave が Capital Hill から空港方面にはしっている。両大通りが橋で湖を跨ぐ、その東西中間あたりが、(湖の上だけれど)地理的には

Canberra のど真ん中になる。両岸はきれいに整備された公園になっている。両岸の公園、両大通りに沿って湖を跨ぐ橋をぐるり一周すると丁度 7 キロぐらいになる。大濠公園のぐるりが 2 キロ弱だから、規模がわかるだろう。もっとも湖全域の周囲は 35 キロほどになるが。

アパートからは、まず Commonwealth Ave の橋を渡ることになる。夜が明けたばかりで、吐く息は白い。大地を掴むように大股で歩をすすめると、横をジョギングの若い女性が駆け抜けていく。するとそれを追うように熟年のジョギングパーティが通り過ぎていく。更にはマウンテンバイクにうち乗ったサイクリングのペアが通り抜けると、先行する早駆けの連中をたちまち追い越していく。疾風迅雷の如し…。頬にあたる空気は冷たく金属の蒼さに触れたようだが、その分、白い朝陽がたちまち埋め合わせていくので、寒さはなく、ただ冷涼さを心地よいと感じる。

湖の南岸は右手に国会図書館、連邦高等裁判所、国立美術館を見ながら遊歩道が 2 キロほど延びる。ジョギング——早駆けや walking で行き交う人と目が合うと、微笑して目で挨拶する。

Kings Ave の橋をわたると、今度は湖岸北側の Kings Park、Commonwealth Park になる。

公園の一角に船の大碇—seat anchor—が静かに蹲っている。Cenotaph—石碑—をみると第一次ソロモン海戦で沈んだ豪州海軍の重巡洋艦 Canberra のものであることが知れる。

第一次ソロモン海戦（1942 年 8 月 8～9 日）を、連合軍側は戦史上、サボ島沖海戦とよんでいる。日本側の戦史上、サボ島沖海戦（1942 年 10 月 11～12 日）はこちらではエスペランス岬沖海戦といっている。いずれもガダルカナル島争奪を巡って生じた帝国海軍とアメリカ、英国、豪州の連合軍側海軍との海戦である。よく知られるように、ガダルカナルを巡る消耗戦で物的、人的資源を消尽させた日本側は、最終的には島の奪還を断念して撤退（大本営発表では“転進”）するが、以降の戦局は坂道を転げ落ちるように悪化していく。航空母艦 4 隻を一気に喪失したミッドウェーの敗北戦（1942 年 6 月 5～7 日）も大きかったが、本当の意味で戦局の分水嶺となったのは、これらガダルカナルの攻防戦であった。この頃までは、アメリカの戦時生産体制が完全に立ち上がる前であったこともあって、ほぼ互角の鏖迫り合いであった——少なくとも大戦後半のように向こう側に一方的、コテンパンにやられる態ではなかった。実際、第一ソロモン海戦では、重巡洋艦 4 隻喪失、1 隻大破の連合軍に対して、喪失は重巡洋艦（加古）1 隻の日本側は戦術的には勝利したと言える——しかし、戦略的にはガダルカナルへの米軍輸送船コンボイに打撃を与えることが出来ずまったくの不首尾に終わった。この海戦は夜戦だった。当時、まだ大戦後半に登場するレーダー射撃が連合軍側には装備されていなかった（されている艦艇もあったが信頼性が今ひとつで、運用法にも習熟していなかった）ので、水雷戦を含めての夜戦をお家芸としていた日本側に分があった（ちなみにレーダー射撃といい、VT（近接）信管といい、最後の原爆といい、大戦後半にはアメリカの技術革新と物量の両面で完全に圧倒された日本側は、殆どまともな戦いにならず、一方的殺戮——屠殺に遭ったといえる。実際、マリアナ沖海戦（1944 年 6 月 19～20 日）では飛来する日本軍機がバツバツと撃ち落とされ“七

面鳥狩り”と擲揄された)。さて、当の Canberra であるが、この海戦で鳥海（重巡洋艦）の放った2発の魚雷を受け、航行不能となったところを、計20発以上の砲弾を食らって、大破炎上した。結局、翌9日朝6時、自軍の駆逐艦エレット、セルフルッジの砲雷撃により処分され海没した。合戦中の撃沈でなかったこともあり、多くは救助されたが、それでも193名の死傷者を出している。石碑をみると、この Canberra が英国で製造されたケント級の重巡洋艦であり、その緒元が記されているのに並んで、「サボ島沖海戦（著者いう、第一次ソロモン海戦のこと）で奮戦むなしく、1942年8月9日に84名の英霊とともに海没した」とだけ刻まれている。日本に沈められたなどと殊更大書していない静かな語り口は、寡黙な海の男たちの風貌を彷彿とさせる。命日にお参りしたご遺族の手によるものか、日付と名を記した wreath（リース、花輪）がいくつも献じられていた。そこに白い朝陽がさすと、あたりは錦繡のかがやきに包まれた…。

1時間半にわたる朝来の散歩はようやく長躯、振り出しの Commonwealth Ave の橋詰へと戻ってくる。すると、そこにもう一つ石碑があるのに気がついた。

「ここにある桜の木々は大平正芳総理大臣が1980年1月に豪州を訪問された際に寄贈されたものです。特命全権大使 黒田瑞夫」

おそらく黒田大使ご本人の筆跡だと思われる。黒田瑞夫氏は国連大使も歴任された外交官のようだが、ご当人は（いくら日本語を解さない国のこととはいえ）ご自分の書跡がこうして後世ずっと人の目に触れることを意識されていたのだろうか。別に淋漓たる墨痕のものす能が外交官に必須だとは言わないが、士大夫のたしなみとしては揮毫を乞われても恥をかかない程度にはありがたいものだ（つい最近の某大臣の変態少女文字にはあきれた…閣議決定の筆書きの連署にもあの墨跡かと思うと…レ・ミゼラブル）。と申して、斯く謂うわたしも悪筆であり人前で字を書く段になるといつも赤面するのだが…。それは兎も角、そう言われて、ぐるりを眺めると、確かに、湖の南岸（Capital Hill 側）も北岸（City Hill 側）も周縁には桜の木が植えられている。

注意して枝先をみると、小さな花芽がちらほら萌しかけている。まだまだ堅そうで、花となるのは当分先だろう。

帰国までに開くかどうか。

この、スケール感も桁外れ、人工ゆえ方正な街路もなにもかも全てにもって整いすぎていて、あまりに我が日本のまちの風情と異なる Canberra に、そこはかかない薄桃色の大和の花が満開となる様子がどう重なり合うのか、是非とも見てみたいものである。

(Aug.21.2010)

8月15日

このエッセイ、早くのも 8 稿目になる。12 年ほど前に、1 年間アメリカに居た折りにも似たようなことをして、結局、『滞米瞰日録』の一卷にまとめた。今回は、懼れ多くも円仁の『入唐求法巡礼行紀』からタイトルを拝借している。それはいいとして、くだんの滞米云々を読んだ知り合いから、アメリカに行って日に日に愛国者になっていくのが手に取るようにわかりますね、と言われたことがある。アメリカにいながら日本を垣間見、考えた諸々を非常に粗雑な一言でもって丸められた気がして不愉快だった。「愛国者」と云う語幹にも揶揄がこもっている。不思議なもので、これは西部邁が言っていたのだったか、朝日岩波的レトリックでもって、スエズ運河を国有化したナセル（ガマール・アブドゥン＝ナセル、エジプトの 2 代目大統領）を愛国者あるいは民族主義者にして第三世界のリーダーであると持ち上げたとして、そこには悪意の欠片もないのだ。ところが日本人が自国と自民族に誇りを持ち、日本人たる矜持や日本の歴史文化伝統を大切にしたいと思うと、これはもう立派に右翼反動ということになる。下ネタも得意なわたしなどは、さしずめ「右下」である。日本とはまことにヘンな国で、自国を悪しざまに言うことが、進歩的でインテリの証のように思われてきた。その文脈からすると「愛国者」とは、アホないしは街宣車か数寄屋橋交差点で辻説法をしているような（赤尾敏も鬼籍に入って 20 年・・・）相当に極端な思考の持ち主を意味する。いうまでもなく、これは戦後主義がもたらした偽善、自家撞着、精神の荒廃からくるものである。二言目には我が国では云々という夜郎自大のお国自慢も鼻つまみものだが、自国のことを悪く言うような人も、およそ世界中どこへ行っても真のインテリとしては尊敬されない。大江某のノーベル文学賞の受賞講演を朝日は一人大喜びしていたけれど、余所の国の人々にはまったく理解されていなかったのではないかと思う。

が、確かに「愛国者」にはややエスノセントリズム（ethnocentrism）の酒精分が強く、使うにためらいを感じる言葉ではある。たとえば、自分の古女房をつかまえて「愛妻」、自らを愛妻家などと齒の浮くような言い回しをすることは出来かねる。そこで私は自分を healthy nationalist（健全なナショナリスト／健全な一穴主義者）とすることにしている。

それは兎も角、冒頭の人々のコメントもそうなのだが、日本の少なからぬ政治屋諸君、就中、現下、宰相の印綬を帯びているお人なども、蓋し、まとまった海外経験がないのだろう。だから、そう言った、ああいった発言になるのだと思うのだ。日本人が海外で暮らし、こっちの人々に交わって仕事なり勉強なりをすると、否応なしに己が全くのエイリアンであることを感じる。感じるなどと云う生やさしいものではなく、否応なく知らしめられるのだ。どんなに言葉が達者だとて、日本語を基盤にした自分の知性を相手に伝達することは出来ない。これはもう相当なフラストレーションである。勿論、語るべきものがないような人は鈍感でいられるのかもしれない。が、それだとて、何も感じずにおられるとは思えない。これはドイツ人がアメリカに行って感じる不如意さ加減などとは比較にならないし、ましてや豪州人がアメリカに行って感じるおのれを異者と思う程度などとは到底、櫛

比し得るものでない。英語圏の連中、特にアメリカ人は、自分たちの流儀は世界標準だと思っていて（実際そうだが）、国境という障壁は浸透膜のようなもので、相手が自分たちの界域に来れば四の五の言わずに適応することを要求するくせに、自分たちが外へ行っても自国のスタイルはそのまま通じると思っている。異を唱えているのではない。致し方ないと諦めている（戦争に負けたんだから）。だから、イチローや利根川博士のようにローカルな文化に依存しない普遍性の高い領域で図抜けた才能があれば別だけれど、普通の日本人は、自らを大海に漂う孤舟のように心細く感じるだろう。実際、世界の中で見れば、日本と日本人とはいかにも心細げで、いってしまえば極ごく卑小な存在である、と云うのが海外生活を通じての私の理解だ。

それでも、日本人であることを実にありがたいと実感することも事実である。日本の国なり、役所なり、会社組織なり、大学なりの保護の元に海外に暮らしてみると、それら諸々、つまり「日本」なるラベルの信用度の高さを実に心強く思うことが多々ある（エジプト出身の Hussein も、パキスタン出身の Kamran もみな自己の才能だけが資本のすべてであり、出身国にながしかのブランドがあるわけではなく他に寄る辺はない）。世界第2の経済大国だと（ついこのあいだ第3位に転落したそうだが、なに気にすることはない……中国の一人当たり GDP は日本の 1/10 以下である）云うことが大きいのだろうが、他にも、戦後は（チト大人子供で片端の気味があるけれど）ごくまともな国になって、如何にも（彼ら西欧の人々からすると）エイリアンなのに、西欧に伍してきちんとした国なり社会システムなりを作り上げていると云う意味で偉観であるとの視線もあるのだと思う。あるいは古くは攘夷ローニン、ついこの間のことでいえばカミカゼアタックのように、窮すれば自らを顧みず信じられないようなことをやってのける人々との一寸した畏敬のまなざしもあるのかも知れない。いずれにしても、その信用は私たちの先人達が営々築き上げてきたものだ。その果実を、私も、菅某も、福島なんかも、その他ひっくるめて今の日本人は放埒に喰っているに過ぎない。

蓋し、これだけ彼らから異化するところ大なる日本および日本人は、向後も、日本および日本人として生きていくしか方途がないと思われる（私たちはアメリカとその兄ちゃん英国との関係、あるいは英国とそのチルドレン豪州のような関係をもって彼らと付き合うことは不可能である——51 番目の州にしてもらっても、今の若い連中のように髪の毛を金髪に染めてみても、膚の色は決して変えられないし、口は縫れたままだ）。司馬遼太郎の『木曜島の夜会』の終句は——**Japanese is a Japanese** だった。

そして、今の繁栄をよしとするなら、日本および日本人であることの信用を喰らうばかりでなく、孫、子の代に継承できるような（少なくともの自分の代だけで蕩尽してしまわぬような）術策を考えなければならない。

そのためには、白いものは白、黒いものは黒と言わねばならぬ場面もあろう。周辺との多少の軋轢は避けられない。

盗人されたものは、きちんと自分のものであると言わねば、元々自分たちのものではな

かったことにされてしまう。境界になった林檎をこちらに身を乗り出して独り占めする隣人があれば、不当な振る舞いであると、しかと発言せねば、実は食い尽くされる。暴力で奪い返せとか、塀上の賊をはたき落とせなど、と言っているのではない。普通にものを言えと言っているだけだ。

8月15日は終戦記念日で、メディアの愚劣な言いようを見るのが不快なので、ここ数年、前後数日は新聞も何もみないことにしている。家人どもがテレビを点けていると直ぐに消させる。こちらでは、対日戦勝記念日であり第二次大戦が終わった記念日である。テレビを見ると、(過日触れた)戦争記念館だろうか、WW2ベテランのよぼよぼの爺さん連中(みな相当な高齢者だもの)が出てくる anniversary の式典映像が流れていた。アメリカでは、日付かわって8月14日だが、ニューヨークはタイムズスクエアで、水兵の帽子をかぶった男とナースキャップをかぶった女のカップル数百組が接吻を交わすイベントがあったそうな。テレビでその映像を見ながら、随分と茶にされたものだと思った。言うまでもなく、ライフ誌を飾った「勝者のキス」は65年前の終戦の日に撮影された。それにちなんだパロディなのだろうが……。

日本では、例によって閣僚の靖国参拝がどうしたので騒いである。家人を怒鳴り散らしてまでオフラインにしていた情報を、海外にいるとつい見てしまうのはどうしたことか。先だつての日韓併合100年の談話にも腹が立ったが、たれ一人靖国参拝する閣僚がいなかったのを自民党との違いを明確にする民主党のスタイルだとか、それを(潰れそうな)斜民党の党首が「評価する」(あんたは一体どこの国のお人だい?)だの言っている報道を見ると、もうどうしようもねえなあと慨嘆するばかりである。

あの人達は、日本の国なり、国富なり、如上の信用が、熱容量無限大の外気かなんかだと勘違いしているのではないか(いくら排熱吐きだしたって温度は変わるまいよとの浅はかな見込み……斯くしてヒートアイランドは起きたのである)。国のお財布には打ち出の小槌があると思っているから、死んだ爺さん婆さんを120歳まで生かしといて、年金食っても何とも思わない。庶人はそれで国が潰れるとは思わないだろうから——それにしても昔はこういったコソ泥じみた犯罪はなかったんじゃないかと思う。しかしだ……国の舵取りをしている連中だつて同じだ。隙あらば、不要な新幹線、空港、高速道路をつくっちゃうし、それが駄目なら環境対策で土建工事をと企む。何度でも言うが、この国の累積債務はGDPの2倍に迫る1000兆円に届こうとしている。財政も国の信用も誇りもいまやズタズタだけれど、本当は何とも思っていない。そんなことより自分のこと(次の選挙?天下り先?)の方が一大事だ。彼らは(行きがかり上)政治や行政を執っているが、感覚は限りなく庶人のそれに近い。

先の談話にしろ、竹島にしろ、腰の引けたガス田交渉にしろ、確たる考えがあつての対応ではないだろう。取り敢えず、曖昧に嗤っておく、頷いておくのとの日本人の個人レベルの行動原理と同じように、取り敢えず謝っておく、文句謂われるようなことはしないで

おく…。果たして、こう云うことで国としての外交が成り立つのだろうか。

(Aug.22.2010)

選挙と捕鯨

本日 8 月 21 日（起稿時点）は下院（定数 150）総選挙である（同時に上院（定数 76）半数の改選（改選議席 40）も行われる）。メディアによるとジュリア・ギラード首相の与党・労働党とトニー・アボット自由党党首が率いる野党・保守連合は纏れに纏れ、どちらに転ぶかわからないとしながらも、労働党が政権維持するのではないかとの観測が広がっている。両党首ともこの一週間メディアに出ずっぱりで、言い方はソフトだが舌鋒鋭く互いを罵り合う様子は、私が見るところほぼ互角。女性ゆえの清潔感、好感度のギラードか、やや頭頂部が薄いけれどナイスミドルのアボットかのビジュアル系ポピュリズム合戦（こりゃ、わかり易い）でも両者伯仲と云うところだと思う。テレビは、日本同様、選挙特番体制で、これまた日本同様、議事堂のフロアが特殊 CG で映し出されるさまにアンカーマンがこいつは凄いなって自画自賛している。

ギラード首相は豪州初の女性首相で、日本には捕鯨ハンター〜イの人として馴染み深いケビン・ラッド首相の辞任を受けて、党内調整の結果、この 6 月に首相に担ぎ出された。Hussein によると、単なる選挙対策さあとの言で、確かに日本でも昨年 9 月、自民党が負けて下野した選挙の折に、麻生では闘えぬ、選挙の貌として小池（百合子）を担げとの論もあったから、どこでも同じってことだろう。男より女の方が集票出来るなら万難を排してもそうするし、知名度で議席が獲得できるのなら元芸人、キャスター、プロ野球選手、プロレスラーから柔道選手まで、何だって問わない（経験不問応相談…）。買収、相手候補のポスター破りと云った従来の選挙違反から〇×学会の民族大移動（ついでに瀕死の病人老人をも投票所に搬送）まで含めて、およそ選挙に禁じ手などないのである。これをもってポピュリズムの墮落極まれりなんて悲憤慷慨しません…普通選挙なんてそんなモンです。

一つこの国の選挙制度で面白いのは、原則、棄権を認めていないことである。特段の理由なく投票しなかった場合は 20 ドルの罰金が科されるそう。これは良い制度だろう。前回 2007 年総選挙の折の投票率はなんと 94.76%だそうで、殆ど北朝鮮や中国など選挙のない独裁国家の選挙（のまねごと）みたいである。日本で同じことしたら、唯でさえ傾いている斜民党（文字通り傾いてる）の息の根は止まり、特定宗教団体である公迷党と兇産党は今ほどの得票率を挙げられなくなること請け合いである。

下院は小選挙区制なので労働党か保守連合かのほぼ二者択一になる。しかし、上院は比例代表制なので、少数政党がニッチで議席を得る余地が残されている。今回の改選では、仮に下院で労働党が勝ったとしても、上院で単独過半数を得るのは難しかろうと見られて

いる。ここで、俄然、キャスティングボードを握ると目されているのが、あの「緑の党」なのだそうだ。上院は日本の参議院みたいな不要の飾り物（ないしは税金の無駄遣い）——もとい、優先権のある衆議院に対する従属的なチェック機関と云うわけではないので、ねじれ国会などと云う暢気な言い方では済まされないのだ。例えば、連邦予算は上院でも議決されねば成立せず、これがゆえに解散総選挙せざるを得なくなった内閣もある。今回、労働党が上院で緑の党の協力を受けざるを得ない状況になると、政策決定に一定の影響が出るだろうとされている。尤も元々リベラルを標榜する労働党だから、あまり関係ないのかも知れない（痔民党に公迷党が、あるいは民酒党に斜民党が閣内協力していたようなモン哉）。おそらく捕鯨ハンタ〜イが、大ハンタ〜イ、乃至は大々ハンタ〜イになるくらいか。

投票日当日、何気なく昼食時にテレビを付けると、聞き慣れぬ音が……あれっ、日本語だぜ。

みると日本の捕鯨をルポルターージュしている報道特番なのだ。これが、また酷いの何のって……。拙宅では（中立を装って偏向している）朝日や NHK の報道番組を見ている家人どもを怒鳴りつけて消させることがよくあるが、今回は何とか途中まで見る事が出来ました……（が、最後はキレて、誰もいない部屋の中で壁に向かってバカ野郎と罵ってリモコンのスイッチをカ一杯押した）。

2008 年に起きたグリーンピース宅配便窃盗事件のレポートだ。記憶の向きもあろうが、調査捕鯨船の日新丸から、乗組員により大量の鯨肉が不正に横流しされていると睨んだグリーンピースの活動家・佐藤潤一（グリーンピース・ジャパン海洋生態系問題調査部長）と鈴木徹（グリーンピース・ジャパン海洋担当スタッフ）が西濃運輸の宅配倉庫に忍び込み、乗組員の一人が自宅に送った荷物を盗み出したとされる事件である。彼らは中身が畝須（うねす）と呼ばれる高級鯨肉 23 キロ余であることを確認。そらご禁制品を抜荷（ぬけに）している動かぬ証拠と、勢い込んで東京で告発の記者会見を開いたまではよかったが、結局、窃盗容疑で御用となった。裁判では、盗み出した事実は争われず、それが窃盗罪に当たるか否かが争点になっている（現在も係争中）。彼らは、市民が国際的にも（捕鯨活動を続ける日本を豪州、ニュージーランドは政府として公式に非難している）国内的（彼らの謂いによると調査捕鯨という不要の事業に多くの税金が投じられているし、横流しされた鯨肉は市場に出回っていて調査捕鯨の名を借りた商業捕鯨であり国民をたばかる権詐である）にも不正義である捕鯨を告発する為にとったばん已む得ない行為であると主張。はては、国際人権規約を根拠に、鯨肉を持ち出して横領の実態を告発した行為は、ジャーナリストに保障されている——表現の自由——と同等のもの、と主張し、無罪であるべきだとしている。あるときは（プロ）市民、またあるときはジャーナリストと随分と変化自在（多羅尾伴内も怪人二十面相も真っ青）な御仕事お持ちの方々だと感心するが、要は巨悪を挫くに微悪は問題にならないとの論である。鯨肉の横流し、横領との彼らの謂いを、水産庁は否定するが、調べてみると乗組員には慣行として一定量を土産として持ち出すことが黙認

されていたそうで、あるいはその一部を自家、親戚縁者、隣近所に配る以外に売りどばしていた奴がいたかも知れない（こちらの事案は結局不起訴になった）。が、縦（よ）し、そうだとすると、それは捕鯨ハンター〜イ反対の国際世論——と云い条、やかましいのはその昔乱獲したアングロサクソンの旦那方だけだが——を前に、（絶滅するどころか鯨は増え続けているのに）商業捕鯨を言い出せず（例によって白を白、黒を黒と言わず）に調査捕鯨と言い抜ける瞞着をこね続けてきた「口が縫れた日本」の悲しい事情のせいではないか、日本人なら先ずそこに思いを致すのが普通じゃないかと思うけれど、どうか。

判決が注目されるが、識者によるとどう見たって英雄たちに分が悪い。そらそうでしょう。唯の盗人だもの。「捜索や押収は捜査機関でさえも裁判所から令状を取らなければできないのに、どうして一般人ができるのか。令状がない時点で正当行為は成立しない。こんな身勝手な行為を許したら世の中がどうなるか。的外れとしか言えない」（京都産業大法科大学院・渥美東洋教授）と云うあたりが常識だと思うのだが、こちら（オーストラリア）の人には聞こえませぬ…環境テロリスト（この場合、義賊・環境ドロ）が悲劇の英雄になれる土壌があるのです。

で、その報道特番だが、勿論、グリーンピース側からの、彼らの主張を全面是とする構成になっている。冒頭、鈴木氏は元バイクのレーサーだったとのナレーションを背景に富士山麓を颯爽とツーリングする姿で登場。佐藤氏は、（一寸驚くぐらい）流暢な英語でレポーター氏との掛け合いに応じている。いずれにしる二人はコソ泥どころか希代の英雄にして闘士、そして知性深い軍師として描き出されているわけだ。番組の半ばには、嘗て捕鯨で栄えた紀州勝浦を訪れ、元キャッチャーボートの射手（皮肉たっぷり、「しかし、いまはホエールウォッチングの船長」とのコメントが入る）にインタビュー。「鯨にも個性があって、特にずるがしこい鯨を追いつめ、最後に自分の銚でとどめを刺すあの快感…死ぬ前にもう一度やりたいと思います（この部分は日本語だ）」との老漁師の独白は、殺人愛好者が血みどろの手を見つめながらあの感覚を忘れられないと白状しているようなイメージで演出されている。捕鯨を是認する論者が登場（この人も英語でちゃんと受け答えしてました）、鯨は海のゴキブリと同じだ——逃げ足が速くて云々と如何にも憎体で発言する部分だけが流される（おそらく前後があったのだろうが、都合の悪い部分はカット——朝日、NHKに限らず世界中のメディアでは、これ常識なんでしょう…たれだ、ジャーナリズムを「社会の木鐸（社会を正しい方向に導く警鐘）」だなんて言った奴は。「社会の偽啄（偽りごとでつつきまわすことによって社会をミスリードする輩）」とでも書き換えとけ）。ヘリコプターから撮ったと思われる、（調査捕鯨で）鯨を射止めた場面では、嗚呼、かわいそうに鯨が目刺しのようにワイヤーでもって海中から巻き上げられ、船上で解体される。無論、甲板は血みどろ。その後、船腹の排水溝から真っ赤な液体が海中に…。もう、これ殆どホロコーストかなんかと同じ扱いだ。

選挙では緑の党の躍進があるのか、ないのか。あるんだろうなあ。

最後に山田風太郎の人間臨終図鑑の一節を引用してこの稿を閉じよう。

ペルリの来航は、要するにアメリカの中国貿易と捕鯨の基地として日本の港を欲したからであったが、百余年後、アングロサクソンは、日本人による捕鯨反対のリーダーとなった。彼らの必要性、不必要性が、その時の世界の掟となる。もともと、ペルリはユダヤ人であった。

補遺

(朝一番の選挙特番では、労働党が保守連合の猛迫を受け、両者伯仲、いずれも過半数に達しない状況となった。次週中に緑の党を含む残余勢力に多数派工作をかけ、連立協議をするだろうから、どちらが政権を担当するかは不分明であると報じている。民意は我々主体の政権維持を認めたと思う、と宣したギラード首相、単独での政権奪取はかなわなかったが与党はマジョリティを失うとの審判と受けの、と言うアボット自由党党首、双方が夜中に行った勝利宣言のごときスピーチが流れていた。そんななか緑の党は大きく議席を伸ばし、一段と存在感を増した。また、史上最年少、若干 20 歳の議員が誕生した——なに驚くに当たらない。当方だって、元芸人が大臣になり、現役柔道選手が議員になる国柄なんだから。)

(Aug.23.2010)

Mount Ainslie (創作)

アクセルを踏み込むと真っ赤なティグラは地を這う弾丸のように一気に登山道を駆け上っていく。

今日が俺の最後の日だ……一ヶ月の集中講義を終えたピーターは夕方の便でメルボルンへ飛ぶ。そこからシンガポール、ドバイを経て、地球半周してロンドンまで還って行く。何を講義してるんだい……そいつは教えられないなあ。何しろ国防上の機密だから。一呼吸おいてから破顔すると、紅毛碧眼の大男は二階から見下ろすようにしてグローブのような毛むくじゃらの手を差し出した。笑うと子供のような顔になった。——いや、バレたら、高級士官（オフィサー）集めて、何だこんなくだらなことを教えてるのかって莫迦にされるから……アメリカ人のようなジョークが最初の挨拶だった。鼻に掛かるアクセントがなければアメリカ人だと思ったろう。東洋近代史が専門のピーター・バルトン教授とはこの三週間いろいろな話をした。その彼が、あまりに天気がいいから、腹ごなしに裏山の Mt. Ainslie Nature Reserve までドライブと洒落込もう、と言った。ジョギングするでもなく、車に乗って山に登ったとて運動になるまいにと混ぜ返すと大笑いした。同室の梁教授とナセル教授が昼食から帰ってくるまで待った方が良くはないかと言うと、構うもんか、と真っ赤な

スポーツカーの鍵をもう掴んでいる。車は大学の借り上げだ。車種は無論、色の指定まで契約書の条項に盛り込ませたと云うから畏れ入る。さすがスコットランド人だ。梁教授は英語が通じないし、パキスタン人で言葉に障碍のないナセール教授は振動工学が専門で話が合わない。それに今が丁度お祈りの時間だ。彼にすると中途半端な私が丁度良かったのだろう。

坂道をぐんぐん加速する彼の運転に私の背はシートに押しつけられ、両足を突っ張ったまま、手は扉の手摺を握りしめている。片側の斜面は危石突兀として、こびりつくように生えているバンクシアの灌木があつと云う間に後ろに流れていく。

「ようやく『腹ごなし—shaking down meal』の意味がわかったよ」

What?—瞬息、こちらに向けたサングラスの縁が陽光で白く輝いた。

やおら両手を口に、すくと前屈みになった私を観て、彼は——おい、吐くな、ここで吐いてくれるな——と大声でわめく。

泣き真似する子供がするように——冗談だよ——と言って起きあがると、小さく舌打ちした彼は——担ぎやがったな、と言うと後は両者大笑いになった。

登れど上れど延々続く岩肌の坂道がとぎれたかと思うと、突如、全周の視界が拓ける。空は群青を塗り込めたように深い青色だった。

山頂の展望台にはたれもいなかった。

見渡す限り赤茶けた大地が拡がる。足許の一郭だけが緑に縁取られている。直ぐ眼下の湖の向こうに Capital Hill が見える。

「コロラドの大地とそっくりだ……」

「へえ、そうかい……そう言えば、あんたは、以前、ボルダーにいたことがあるってことだったね」

「コロラドの意味知ってるかい？」

「さてね」

「赤い大地の意味だよ。カラー・レッド……」

「如何にもヤンキーの言いそうな安直な命法だ」

彼のアメリカ人への敵愾心は筋金入りだ。マクドナルドは彼の故郷のスコットランド人の姓だが、あんなアメリカ発祥ジャンキーフーズなど金輪際口にしないという。そのくせ脂まみれのピザは大好物だから、体を考えてのことではなさそうだ。金満になった分家の連中を罵る唯の近親憎悪とは違う何かがありそうだが、そこに迫るには一ヶ月弱の時間では短すぎた。

「いや、そうじゃないさ……コロラドはスペイン語だよ」

ピーターはふ〜んと唸ってから、こんだけ語り合ってきたのに、いよいよもって、俺はあんたがなんの専門家なのかわからなくなったよと笑う。

「君には僕たち日本人の知的フラストレーションはわからないだろうな」

結局、これまで何度も話題に上ったことに行き着く。

「ああ、想像できないね」

思ってもいないのに、そんなことはないかと大仰に否定してみせるよりはるかに真直な謂いだ。

「こうして君と話していても、そっちは堂々たる大人なのに、僕の方はダグラス・マッカーサーの言明じゃないが、丁度 12 歳、小学 6 年生の少年って役回りになる」

確かに、俺はあんたの体格の 1.5 倍はあるからな……ピーターは喉仏を上に向けて呵々と笑う。

「君が、ここやカナダやアメリカのデフェンスアカデミーで近代戦史を講じてまわるってのは、ちょうど僕にしてみると東京の大学から、札幌、大阪、広島、福岡と全国を非常勤講師で行脚して回るのと同じ感覚なんだよなあ」

「どういう意味だい？」

「君たちにとっての *oversea* と僕たちのそれとは全く概念が違うってことだよ」

「また、例の皮肉かい？」

私は無言のまま、シドニーへと伸びるハイウェイが地平線に消える辺りを見ている。

「じゃあ、そのあんたがホームグラウンドのトウキョーからオキナワへ行くどころでなく、この赤茶けた大地の *Land Down Under*——地球の裏側の国まで遠路はるばるやって来てるって云う、今あるこの現実を、俺たちの体験に焼き直すなら、どう云ったことになるんだい。適当な比喻で言って呉れないか？」

「さてね……それは難しい質問だなあ——」

赤い地平線のはてには薄く陽炎がたっている。春が立って、すぐそこまで来ているのだ。

力一杯空気を吸い込むと、ユーカリの香にまじって若草の臭いがした。

「——ああ、これだ、これだ。この赤茶けた大地だよ！」

「……？」

「つまりだ——」

「……僕たちが海外に出かけるってことは、君達にしてみると、言ってみりゃ火星に行くようなもんだってことだよ」

一瞬あって顔を見合わせた二人は、ひろい蒼穹を見上げて、腹の底から哄笑した。

(Sep.1.2010)

豪州が観る日本と日本が観る豪州の狭間

研究室では 2 週間に 1 度、水曜の午後に皆が集まってゼミをしている。研究を進める主

体はポスドク連中で、学生といえばドクターコースであって、修士の学生はゼロではないがマイノリティだ。観ていると、Kamran がポスドク中の番頭格のようだが、原則、皆、自己のテーマを自律的に進めている。Hussein は忙しいので、手取り足取りというわけにはいかない。彼一人が先生で、これだけの人数の面倒をみるのは、食い扶持（奨学金とサラリー）の確保もさることながら、さぞかし労苦多かろうと想像する。

こう云った機会でもないと、国内外を問わず、他人の研究室の中を覗くことはないから、ゼミの進め方一つとってもなかなか興味深い。この2週に1度のゼミは、毎回1人が40分くらいで進捗を報告し、その後、20分程度みな質疑を受けることになっている。ゲストとしての立場上、いろいろ質問させて貰う（して上げる）けれど、他の連中はあまり他人のことに関心がないのか、日頃から聴き馴れているので訊く必要もないからなのか、あまり議論が奮っているようには見えない（うちもそうだから、どこでも似たようなモンなのだ…おい、そこ居眠りしてるんじゃないぞ）。どこかでも書いたけれど、驚くべきは、この研究室は殆どが留学生、あるいは元留学生で占められていることであろう。中国、中東、ベトナム、パキスタン、マレーシア…こうして顔ぶれを眺めると、一体どこの国の大学なのかわからなくなる。殆どが国立大学のこの国では、オーストラリア人は学費なしだから、大学の財務当局としては、本業である自国の若者への教育サービスが低下しない限り、フルフェアーで学費を徴収できる留学生は積極的に受け入れるに如かずとの考えが基底にある。無論、アジア圏の若者にしてみると、米国やUKに行くより遙かに近くて、その意味でも経済的に、高質の英語による高等教育が受けられるから、大きな需要があつてのこの眼前の風景なのだけれど。到底、世界標準の英語による高等教育など出来もしないし、その需要もないし、そうする必要もない——無論、それには自国の若者の数が減れば大学は整理縮小してよいとの前提がある——と思われるのに、何とかサアティなどと言っちゃ無理に留学生を掻き集めようとしているどっかの国（のどっかの大学か）とは事情が異なるのである。

この国で学位を取って、その後、ポスドクとしてキャリアを積み、そのままここに居ついて、しまいに帰化してしまう場合も多い——才能があつて、運に恵まれ、その上で努力おさおさ怠りなければ Hussein のように成功するチャンスがある。

若き日の自分ならチャレンジしたか…さあ、わからない。

が、いかに物質的に豊穡でも、日本人としての自己規定が先に立って、そこからくる社会的精神的な諸々に満たされた環境を優先するだろう自分には、そもそも取り得ないオプションだったろうと仄かに想像する。未だに日本人にとってみると、西欧圏のしかるべき大学でちゃんとした留学をすることは、どこか憧憬の対象ではあつても、大学教育を受けるための一つの実際的選択肢という風にはなっていない（幸か不幸か言語障壁が大きすぎるから、向後もそうなることはあり得ない——勿論、51番目の州か東海省もしくは倭人自治区にして貰えればそんな言葉の壁なんて吹っ飛ばされるだろうけど）。少なからぬアジアからの留学生がそうであるように、退路を断って出てくるつもりなら別だが、いずれ日本

に帰るつもりであれば、留学により得るものもある一方、重要な何かを失うリスクもあるのだろう。日本は、一旦、一般的なキャリアから逸れるとなかなか旧に復し難い閉鎖型ムラ社会である。過日、こちらに留学されている日本の方が同趣のことを仰っていて、大変印象深かった。

別稿でも述べたけれど、現下、この国ではアジア圏のエスニックグループの総人口に占める割合が急増している。東欧まで含めてヨーロッパ系が 90%以上（そのうち英国、アイルランド系は 75%）だった 1988 年の統計を観ると、アジア系は僅か 2%だった。ところが 2025 年には、前者が 80%に低下、しかるに後者は 16%に増加すると見積もられているから、激変といってよいだろう。一つには、如上のように主として高等教育を受けた移民が堅調に伸びるだろうこと。加えて、後者のエスニックグループの出生率が前者のそれより大きいことが上げられる。きょう日、流石に白豪主義の看板は取り払っている。当面は人口比の点からも白人のマジョリティは揺るがないが、遠くない将来、この人口比の変容がこの国に別の momentum を表出させる可能性はあると思う。

この国の構成員、移民という観点からは、日本との関係は限りなく薄い。

これまでも希薄だったし、これからも深まることはあり得ない（なにしろ日本は総人口が減少し始めているのだから）。司馬遼太郎の「木曜島の夜会」をご記憶の向きもあろう。あそこで描かれていたのも移民ではなく契約労働者である。合成樹脂がふんだんに出回る前、ボタンの高級材料として真珠貝の需要が世界的に大きかった。20 世紀初頭の若き豪州連邦は、この大陸の北側の開発に着手するとともに、余勢を駆って南太平洋へと進出していく。木曜島はヨーク岬半島の最北端から 35 キロ北、トレス海峡に浮かぶ小さな島だ。オーストラリアの人々は、ここが真珠貝の宝庫であることを発見し、資源開発に乗り出す。この時期の一寸前にこの大陸で起きたゴールドラッシュでも似たような事情があったが、何しろ人手がない。英国本国からの囚人供給は過去の話だし、欧州からの移民は積極的に受け入れていたけれど、労働力需要に全く追いつかない。アメリカの奴隷解放後、アフリカから黒人を拉致してくることも出来なかった。そこで彼らが目を付けたのが、アヘン戦争後、西欧列強の蚕食するにまかされていた中国だ。上海租界などを經由して、いわゆるシナ人クーリーを買い付けて来て（実際、殆ど人身売買に等しかった）、炭坑、プランテーションなどあらゆるところで中国人労働者を使い始める。だが、潜水具を身にまとい海中に没して貝を水上げすると云うのは、労働として中国人に向いてなかった。魏書や後漢書の東夷伝をみてもわかるように、漢人は伝統的に海に潜って漁労をする人々——倭人も含めてだが——を得体の知れない野蛮人だとみなしてきたし、そもそも出来もしなかった。インド人（フィジーのプランテーション開発に当時英国の植民地であったインドから強制的に連れてこられた）やカナカ人（メラネシア系先住民で、クイーンズランドの綿花やサトウキビのプランテーション開発に南太平洋の島々から、やはり強制的に連れてこられた）にやらせてみたが、これもうまくいかない。無論、白人自らやるつもりも能もない。ここ

で登場するのが、日本人なのだ。鯨採りを生業にしていた熊野灘の壮丁たちが、やはり契約労働者として、やってくる。日本人は、ダイバーとして殆ど天才的な能を発揮する。「木曜島の夜会」では、当時といま（もっとも司馬が取材するのは1970年代後半だけけれど）の時間を行き来しつつ、日本人ダイバー達の悲哀をみごとに描出していて、日本人とは一体何者なのか、日本人にとって海外とは何なのかをつくづく考えさせられる。

で、いずれも、つまり熊野灘の壮丁たちも、中国人も、インド人、カナカ人たちも契約労働者としてこの大陸にやって来た。このうち、文字通り契約労働者として、自らの意志で来、仕事をし、それが済むと母国に還っていったのは日本人だけだった（無論、例外もいた）。その他は、実質的には強制的に連れてこられた事情もあるだろうし、母国の貧しさ（当時の日本も貧しかったけれど、それとは比較にならぬくらいの悲惨さ——なにしろ、植民地ないしは実質植民地であったのだから）もあって、容易に本国に帰らなかった。契約労働者は移民ではない。正規の移民として認めていたのは白人だけだったから、その落差はほとんど時間労働のバイトと正規社員のそれと同様もしくはそれ以上である。白人たちは、正規の社会メンバーとして認めていない、契約労働が終わってもこの国に居ついてしまった彼ら——主として中国人だが——に異常なほど神経をとがらせる。しかし、労働力としては排除することも出来ない。矛盾である。これが、この国に対外的には白豪主義をとらせ、移民制限政策に向かわせることになる。

実質、同じ人間と認めて、社会のフルメンバーとしての加入が許されていたのは白人だけだったのだが、そんな中でつねに微妙な関係だったのが日本および日本人なのである。無論、非白人という意味では、同じ人間であると認めてないことには変わらない（今もそうだろう）。しかし、明治後の日本は急速に列強に追いつき、第一次大戦後には、当時の五大国（日本および米、英、仏、伊——このうちアメリカ以外は国際連盟発足時の常任理事国）の一角を占めようになる。宗主国である英国と3次にわたる日英同盟を結んでいたこともこの国に、日本に対する曰く言い難い立ち位置をとらせることになった。

オーストラリアの安全保障上の懸念は常に北方からやって来た（今もそうだ——いつだかも言ったがADFAにはインドネシア研究科がある——かつて、1910年代に対日情報収集とスパイ養成のためシドニー大学（1850年設立）に日本研究科が設置されたのと同様）。19世紀には、南太平洋で植民地拡大の競争を繰り広げたフランスが——これはオーストラリアと云うより英国にとってとの意味で——、その後は、英国とクリミア戦争（1854-1856年）を戦ったロシアが脅威であった。その意味で、日露戦争の日本の勝利やそれを強力に支援した日英同盟は、ある時期まではオーストラリアの国益（当時は連邦成立までであったが）にそぐうものでもあった——この時期、非白人移民を制限する法律を日本に遠慮しいしい成立させたり、それに英本国が政治的判断から強い調子でたしなめたり——別に日本を白人国家として認めてのことではない——それでも白豪主義は譲れないと表意したり、と云った政治風景があった。ロシア退場後の脅威は、おくれて植民地競争にやって来、当時、ニューギニアおよび南太平洋の島々を次々に植民地にしていたドイツだった。そのドイツ

も第一次大戦で敗れ、直接の脅威でなくなる。戦後、よく知られるように、ドイツの南太平洋の植民地は赤道以北を日本が、以南を豪州が委任統治する。私たちは、ありがたくも日教組教育のおかげを被って、かつての日本が領土的野心丸出しの帝国主義の侵略国家だったことをさんざん教えられてきたわけだが、どうして、この国も南太平洋に対しては烈々たる帝国主義国家だったのだ（余談だが、第一次大戦後、日本はパリ講和会議（ベルサイユ会議）で人種差別撤廃案を動議する。日米間で移民に関する角逐があったこともあるけれど、非白人の主要国としての自負とそれなりの正義感があってのことだったことを我らはもっと誇ってよい——これも日教組教育のおかげで、そう云った文脈で語られてこなかった。が、これは廃案になる。反対の急先鋒がオーストラリアであった）。しかし、常にオーストラリアの安全保障には英国本国の庇護と担保があった。具体的には英帝国アジア経営の策源地としてのシンガポールの存在と英国東洋艦隊の偉容（今で謂えば核兵器による抑止力のようなものだ）があった。それが、第一次大戦後に変化する。つまり、最後の仮想敵国として、オーストラリアの脅威となって立ちはだかつてきたのが、他ならぬ日本なのであった。1905年に英国東洋艦隊の主力艦がシンガポールからいなくなり、日米（日豪ではない）間の移民問題が紛糾するに及んで、自主防衛、白豪主義の観点からも、この国には深刻な日本脅威論が頭をもたげてくる。当時、豪州にとって貿易相手国としても日本はもはや無視できない存在であったのだが、人に非ざる黄色人にも不拘（それが当時の常識だった）、今や自らの脅威となった日本を心底、小面憎いと思っただろう。

結果的には、その日本は太平洋戦争と云う形で暴発し、その脅威は取り除かれるに至るのだが、おそらく、その経過はこの国の正規メンバーである正統筋目の英国系白人たちにある種の影を落とさずにはおこななかったろうと想像される。

開戦劈頭、誇りでもあり頼みでもあった英国東洋艦隊はあっさり沈められ、金城鉄壁と思っていたシンガポールは陥落、自国の庭どころか、玄関先とはいえ本土（ポートダーイン他ブルーム、タウンビスマルクなど）が空襲され、本丸シドニーが潜水艦の攻撃に遭うに及んでは、それまでイエロー・モンキーのジャップに飛行機など拵えられないし、操縦なんて出来もしないさ等と嘯いていた人種主義的優越意識や自尊心は大いに傷つけられたろう。フィリピンから脱出したマッカーサーが豪州にやって来、ここを対日戦反撃の根拠地にするに及んでは、日本への敵意、それ以上のショックへの反動もあってのことだろうが、アメリカに熱狂的な好意を寄せるようになる——爾来、安全保障上の保護者は英国に変わってアメリカになった（ANZUS 同盟）。実際、宗主国の英国は頼りにならなかったし、対日戦の勝利も実質的には、アメリカが日本をやっつけてくれたのであり（日本もアメリカに負かされたと思っているわけだ）、アメリカなくして日本の挑戦は斥けえなかったことも彼らとしては認識せざるを得なかった。それが、兄貴かおじさんか、はたまた友人かわからぬが、言語文化もなにもかも全く同類であるアメリカに対しては、信頼感と同量のコンプレックスを残したろうし、優越意識と同量とはいわぬが日本への潜在的コンプレックスも残置したろうと推量されるのである。旅行者がするような表層的な観察でも、この国

の一般の人たちが、意外なくらいアメリカをよく思っていないこと、ときに口を極めて罵るさまに、上記の残滓を観るだろう。さりとして、影響を受けないわけにはいかぬし、無視もできないアンビバレントな感情は、単純な近親憎悪では片づけられない深い根があるのだ。同様に日本に対する潜在的意識過剰も、認めたくないだろうけど、除去できない。少なくとも日本人が豪州および豪州人を意識しているよりは大きく彼らの意識下に日本の存在があるように思われる。単に為替相場の欄で米ドルの下に日本円があるのをテレビで観るからではない。メディアの日本の取り上げ方が、常に軽い悪意を含んでいる様子に垣間見るのだ。これ、鯨だけではないのだ。ニュース番組で日本からの外信が映像込みで伝えられることは、このところ絶えてなかった。選挙があったわけでも、大洪水、大地震があったわけでもなく、せいぜい甲子園がどうしたとか、小沢某どうしたのと云った程度なので、図入りで報じるまでもない（この点、どうでもいいことまで映像で報じられる英国やアメリカほどは日本の存在は大きくない——当然だ）。ところが、前後不断、全くもって唐突に、一昨日の晩方のニュースで、陸上自衛隊の富士裾野演習の様子が伝えられたのには、微笑を禁じ得なかった。なるほど、こうして意識下の意識が、未だにありもしない（口で言いはいしないけど）“日本の軍事的脅威”の図となって彼らに屈託を感じさせているのだと思ったわけだ。一瞬、オーストラリアにいながらテレビ朝日を観ているのかと思ったほどだ。そう考えると、ケビン・ラッド前首相（現外相）が日本の捕鯨をややヒステリックに非難していたのも何となくたわいなく思えてきた。どっかの国があいも変わらずステロタイプの反日報道をしているのと同じメンタリティだと思えばよいのだろう。要は日本が気になるのである。惚れられるのも楽じゃない。

(Sep.5.2010)

Pye 研究所

CSIRO はオーストラリアの国立研究機関である。日本にある所謂、国研を全て統合した機関だとおもえばよい。Canberra と Melbourne に様々な研究分野の研究所が分散していて、ここ Canberra は Black Mountain にある研究所は、本部管理機構のある大規模なものである。なかなか凝った造りのビジターセンターも併設している（この 2 月に Australia Japan Emerging Research Leaders Exchange Program 2010 の折に訪問している）。広々した敷地にぼつぼつと夫々の研究所が散在している。アパートから Australian National University のキャンパスを抜けて、Black Mountain の見当に向かって歩いていくと 15 分と言ったところか。

海洋大気研究所である Pye 研究所は、敷地の中程、これまたモダンなデザインの図書館の対（トイ）面にある。

約束の 11 時 15 分きっかりに研究所にたどり着いた。中にはいると、またまたこれが何と

も贅沢な建物なのだ。玄関のスタッフのネームプレート (Directly) をみると 30 人くらいの小所帯のようだが、なかなかどうしてゆったりしている。中は 2 層で玄関からアプローチすると中庭形式のアトリウムに導かれる。これを取り囲んで各オフィスが配されている。非常に明るい。なんたる贅沢さ。一見して古い建物だとわかるが、建具はほぼ木 (もく) で出来ていて、いかにも高質でしっかりとした造りだ。のちに 60 年代の建築と訊いて、なるほどなあと思った。

2 階中央にある溜まりのスペースが何やらにぎやかである。当方、ぼんやり突っ立っていると、Finnigan 教授が降りてきてくれた。そう、気象学者の John Finnigan 教授である。都市気候は若い分野で、ここ 30 年ほどで、気象学、流体科学、土木はては建築といろいろな人たちが参入してきているのは洋の東西を問わないが、最も地力がしっかりしているのが理学出身の気象の人たちである点も彼我で同じ。そのなかでも Finnigan 博士、Raupach 博士の名を知らぬ者はモグリである。植物キャノピー、最近では都市キャノピーを包含する所謂 bluff body (植物キャノピーはこれに対して permeable) で構成されるキャノピーの乱流メカニズム、ダイナミクスの詳細を風洞実験、解析、両方のアプローチで一貫して究明し続けている。私たちの研究室でも、ここ 10 年弱、都市キャノピーにおけるバルクで観た運動量とスカラー輸送の効率を適当な幾何パラメータでスケールアップ出来ないかとの興味から系統的な風洞実験に継続して取り組んできた。萩島理博士の仕事である。積み上げが実って、ぼつぼつ Boundary Layer Meteorology に論文が掲載されるようになった。その我らからすると、Finnigan 博士は見上げるほどの巨人である。が、実際の John Finnigan 教授は、どちらかという小柄な、そしてイングランド訛りの強い温厚そうな初老の紳士であった。

訊けば、毎週金曜の午前中はこうやって皆でケーキを食いながらお茶を飲むのだそうだ。私も一座に加えて貰ったが、皆さん思いおもいにあちこちでお喋りの花を咲かせている。

訪問に先立って研究室の journal paper のリストと私の CV を送ってあったのだが、それを見て、都市気候から複雑系物理、建築物理まで随分と範囲が広いのに感心したのと、(質は兎も角) 出力の多産さに驚いていると言う。無論、外交辞令である。なに唯の scramble egg——なにもかもまぜこぜのチャンプル状態の意味——ですよと返すと、笑っている。如何にも理学系の先生らしいのは、笑い方一つとっても呵々大笑というのでなく野卑なところが全くないこと。かと言って寡黙で気むずかしそうと云うのでもない。

所長の彼のオフィスは角部屋で秘書の居る前室の奥にやや広い私室がある。ここに Margi Bohm 博士と Ian Harman 博士を呼んでくれた。Harman 博士は、うちに一度遊びに来た Reading 大学の Janet Balow 博士とかつて仕事をしていた若い人で、最近では Finnigan 教授と連名で BLM にモデリング関連の論文をよく書いている。Janet のところでは、ナフタレン昇華法でスカラー輸送効率を特定する実験やらモデル構築をしていたのだが、最終形がややコテコテ系の幾何モデルだったので (まあ確かにそうだった)、元来、物理指向の強い自分はどうかなのかなあと思っていたとの由 (蓋し、彼の学位論文だったのだから周囲の意向が強く働いての仕事の方向性だったのかも知れない)。彼もまた如何にもサイエンスの学究らし

い、寡黙とは言わぬが、どちらかといえば沈毅な風の人である。Margi は風洞実験を専門にしている人で、Raupach 博士との共著論文も多い。人をそらさぬ陽気な態で話をする。

John のオフィスで小一時間、萩島先生に持たせて貰ったスライドを説明する。互いに餅屋なので、コネ方つき方にまつわる微に入り細に入ったディスカッションになる。なべて言うと、我々が結果は彼らにすると成るほどさもありなんと云うところなのだが、どうしてそうなるのか、実際の乱流機構、力学プロセスがどうなっているのかが、彼らの興味の対象なので、その裏側もしくはその先を知りたいと云ったところか。

この Pye 研究所では、John の元々の専門である海洋や大気的气象だけでなく、昨今は、どこでも同じだが、より広範な意味での環境問題に資するアジェンダを掲げるようになって、気象と経済活動とリンクさせた CO2 排出のアセスメントモデル、人為活動と気象との相互作用といったまあ世間受けする課題にも範囲を広げている（広げざるを得なくなっている）らしい。ただ、ただ漫然と上げると、これまた日本でもよく見かけるが、唯の統計ブラックボックスモデルになって如何にもサイエンスとしては新規のない、平俗でごくつまらないものになるし、いかがわしい際ものを拵えることになる。就中、理学者の彼にとっては、気持ち悪いことこの上ない。そこで、ピュアな物理学者を招聘して複雑系物理とのリンケージが出来ないかを模索しているとのことであった（昼食後、ドイツから来ている統計物理学者 Markus Brede 博士と暫し議論したが、彼は元々ネットワークに関する理論物理屋で進化ゲームは余り詳しくないのだけれど、ネットワークと戦略の共進化モデルの話にいたく興味を示し、何か一緒にやる余地はないかとのはなしになった）。

Ian の要所の発言も中々本質的な点を衝いていた。日本の貢献は東工大の神田学博士を除くと、うちでもかつてやった AUSSSM もその例だろうけど、皆なんだかコッテコッテのメソ接続用サブモデルなんかに興味を持っているようで、どうしてなんだか（なんでそんなことが面白いのか）奇異に映るらしい。その気持ちは共有できる。日本の都市気候の人々には建築を筆頭にアプリサイドをバックグラウンドにする人があまたいるので、未知を解明すると云った指向と無縁の人々もいる——社会向けメッセージをどうストーリー立てるか（でっち上げるか）にだけ興味が向く人々——のだと説明すると、なるほどなぁと言う。それにしても、John も、無論、Ian も Margi も、日本の総理大臣の名前や天皇陛下のファストネームは知らないけれど、神田先生の名前は知っている。野球好きの前でイチローの活躍を日本人として嬉しく思うのと同様の誇らしさを感じる。

John は北イングランドの出身で、もうこの国に来て 30 年以上だそう。既に帰化しているのか否か知らぬが（UK から豪州への帰化なんて、北海道から沖縄に住民票を移す程度の意識だろうし、事実そうだろう——いつだかも書いたが 1984 年以前は Commonwealth 内では国籍移動なしに相互に選挙権等を認めていて帰化などする必要自体がそもそも無かった）、隣の Ian（ここにきてまだ 7 年くらい）に君はもうここ（豪州）に籍は移したのかなんて軽口をきいている。Margi はファミリーネーム Bohm（o にはウムラルトが付いている）からわかるように南アフリカ出身（たぶん家系のオリジンはオランダ系（ポーア人）なの

ではないかと思う——Bohm はドイツ周辺の北欧州でよく見かける姓である）で、米国の環境省で仕事した経験もあるらしい。のち、ここに腰を落ち着け、現在は Canberra 大学応用理学部に勤務の傍ら、パートタイムで Pye 研究所に来ているとのこと。こうしてみると誰一人、オーストラリア出身の人はいないわけだ。きわめて人の流動性が高い。それは、この稿で何度も出てきたけれど、彼らにとってみると、国の違いなんて我らが本籍のある県、若しくは出身地の違い程度のモンであって、全く本質的な問題ではないからである。今更、嗟歎してもどうしようもないけれど、何とも羨ましい。いくら普遍的真実を解明する科学の徒であろうと、我らにしてみると、スタートラインが斯様に非対称であるわけだから、そもそもフェアな競争になっていないと思うわけだ。勿論、(英語圏の文化が)世界の De fact Standard であることを彼ら自身もよく認識しているから、異なる界域からの貢献には襟度大きく受け入れるに吝かでないし、それを実際、最も明快な形態で具現化している米国にあっては、例えば、イチローのような才能を認め称揚する懐の広さがあることは認めねばならない。でも、それは優者が高見に立って絶対劣位にある者に対して抱く（かつ、それがマイノリティである間にだけ示す）余裕があつてのことであることも忘れまい。神田先生は無論イチローになれたらうけれど、日本に留まって仕事をしている。我ら凡俗の日本人としては、ありがたいし、心強いし、彼らに対して誇らしくも思う。いつだったか、神田先生から、彼がサバティカルでドイツに留学していた折の UK の田舎旅行でした体験譚を聞いたことがある。愉快でない——決して彼らがここ豪州の田舎町を旅しているときに経験することはなかろうと思われる類の咄であつた。それが事由だとは言わぬが、神田先生ほどの才能の持ち主をしても、結局は外へ出ていってしまおうとさせるに踏み切らせない強いドラッグがあるのだ。なんと日本人とは可憐で儂くも哀しい存在なのだろう……。煎じ詰めれば、言葉の壁が如何に大きいのか、肌色の違いがいかに強く影響するかと云うことになる。勿論、閾値を超えれば Hussein に観るように、こちらに同化して、成功を収めることが出来る。そうなつてしまえば、実際には肌色の違いなんて大したことないと言えることになる。が、それは Hussein のような人がいう言明であつて、こちらの連中が言えたスジのものではないと思う。イチローですら、アメリカ人選手用の判定と自分へのそれには温度差があると言っている。（たかが——もとい）野球と科学研究とは同列に論じられないとは思うが、根は同じだ。

Margi に地下にある風洞実験室を案内して貰つた。圧力勾配が制御できること、レーザードップラーの物凄く佳い測定キットがあることを除けば、そう彼我で差があるわけではない。学生はいないので（これにはホットワイヤーのプローブを切ってしまうリスクもない余徳がある——痛い経験のある当方は大いに腑に落ちて笑つた）実験するに時間は掛かるらしいのだが、手練の技官がいて全てを取り仕切ってくれる。そうやって、ここで、あのハイクオリティのデータを撮っていたのかと大いに納得した次第。

で、この話のオチとしては、是非、帰国前にもう一度来て貰つて、研究所の皆に向けたセミナーをしてくれということになった。そうなるとう気象屋さんだけではないので、流体

力学と複雑系物理のシナジーの観点から、交通流に観る数理ジレンマのネタがいいかなあ
とっている。

(Sep.10.2010)

無題

最終稿を既に書き終えている。筆は仕舞ったつもりでいた。

昨日、尖閣の船長を釈放したと言い、今日は、日本に謝罪と賠償を要求するとの報道があった。一度足許見られれば同じこと。今度も要求通り、最後は朝貢を兼ねた白装束の謝罪使が北京に飛ぶのだろう。いっそ沖縄の割譲まで言って貰ったらいい。落ちるところまで落ちたらいいのだ。彼らがどう応えるか見たい。同じように、御高説ご尤もと応じるのではないか。「高度な政治的判断」とやらで（ふざけるな・・・何が日本は三権分立の法治国家だ——政治的判断が司法に及ぶのなら、独裁の人治国家と同じだ）。中国のやり方を石原慎太郎はやくぎの縄張り云々と言い、確かに連中はごろつき同然だが、21世紀の今日日珍しいとは云え、外交とはそんなものだろう。これ見て隣国も竹島どころか、日頃の言明通り対馬をよこせと言い出すだろう。気前よくやったらいい。友愛の島だ。もう日本は国の態を為していない。冗談で書いてきたが、早く51番目の州にして貰わないと、日遠からず倭人自治区になる（まだ、英語の方がいくらかできる）。彼らと書いたが、今のリーダーシップを執っている連中だけを指すのではない。彼らは確かにお粗末だが、それは我らがお粗末だからだ。チャーチルが言っているが、その国の政治家の程度はその国の民度を越えない。彼らが無責任で無為無策、知恵もなく気力もないのは、そのまま我ら自身に当てはまるのだ。このお粗末さ加減は、日本のあらゆる階層を縮小コピー版で覆っている。官庁、大企業、大学どこも同じだろう。

茶にするにしてもどうにも力が入らない。

深い絶望感だけがある。

その国に来週還って行くのだ。

毎週土曜と日曜に湖の周りを周回する散歩に出かける。Capital Hill側にはこの国と外交関係のある、つまり大使館がCanberraにある国々の国旗が立っている。決まって、胸に手を当て日の丸の前を仰ぎ見ながら通り過ぎる。今朝は寒の戻りか、湖をわたる風が冷たく、涙が出てとまらなかった。

昨夜、私のfarewellとのことで、Hussein一家、秘書のFiona夫妻、(いつだか登場した)Spike父娘が会食に招いてくれた。Spikeは15年ほど前にNTTの武蔵野研究所に2年間お stok奉公をした。彼はUK出身(従ってイングランド訛りが強く、私には聴き取りにくい)の人だが、この2年間が大いに彼の価値観に影響を与えたそうで、日本人社会の美質に染

まってこっちに戻ってきて、当初は大変なカルチャーショックだったそうだ。彼は、日本は大丈夫かと言って眉を曇らせていた。

中国漁船は当局から金を貰って今回の蛮行に及んだとの説もあるそう。だからひたすら黙秘していたらしい。檻樓が出ては一大事というわけだ。外交駆け引きで云う trap というやつだ (かつては橋龍を筆頭に連中のオーソドックスな honey trap に引っかかったことも記憶に新しい)。彼らならそのくらいやるだろう。威力偵察だ。日本はアメリカに尖閣は日米安保の対象だと言って貰ったところで腰が砕けた。国務次官補のコメント見ると、おおよそアメリカから、安保内だと言ってやるからこれ以上波風立てるな、とでも言われたのだろう。そのうち、「対象範囲内であるとは言明しない」と言われるようになるに、そう時間は要しないだろう。強烈なロビーをしてもあんな台湾を見ればわかる。腰抜けの去勢国家にアメリカがそういつまでも顧慮するとは考えにくい。当たり前だが、アメリカはアメリカの国益だけを考える。そして外交とは power politics の角逐そのものの営みだ。これは日本を除くいかなる国家でも普遍的真理とされている。

現在の日本には、原爆も原子力空母もないし、かつての連合艦隊も関東軍も存在しない。自衛隊は軍隊でないそうだから、軍事的プレゼンスはなきに等しい。それは現実だからどうしようもない。問題はその現実を踏んでどんな手が打てるのかに知恵を出すことだ。落ち着いて考えてみれば、中国とトータル経済規模がほぼ同等で、生産性は 10 倍以上、人口は 1/10 以下だが、国土の狭さはそれ以上の比だから、我らさえその気になれば、軍事的恫喝など怖れなくとも済む手がいくらでも考えられる筈だ。ましてや向こうは無法者の横車で理はないのだ。いくら旭日昇天の勢いで、「草木も靡く北京へ靡く」だろうが、偽善にしろ世界の外交舞台では未だ何が理で正しいかが一定の説得力を持っている。インド、ベトナムは言うに及ばず多くの国が彼らの無法に困っている。

きっと今度の出来事は、のちに「あれがルビコンだった」と嘆じるターニングポイントになるだろう。

この稿は私の日本人学生全員に配信している。そのうちいくらの方が読んでくれているのか知らぬが、私は日本の次の世代を担う若い人たちに何事かを伝えるために大学に職を奉じてきた。何事かは曰く言い難い。それが普遍的な科学や技術にまつわる事どもだけなら、私より適任が幾らでもいる。そうでない何事かだ。

だが、そもそも現下の日本は次世代に継承すべき何事かを有する国家と云えるのか。先人達は、小さな島国の中で、充分他に誇ってよい豊穡で奥行き深い歴史と文化とを築き上げてきた。翻って、ここ数十年の日本は、物質的豊かさだけに至上の価値をおき、あとは全てをうっちゃってきた。舵取りをする連中の無責任、無能は目を覆うばかりだけれど、煎じ詰めると、今回の騒動であった民主党筋の発言「今度の事態を放っておいたら戦争になった」(戦争になるとの推量もいかにも短絡で粗雑な論であるけど、それはおいといて)に全てが集約されているような気がする。丸めて言うと、戦争になるよりも生きているこ

とが大切、命あってのものだね、無理無体であろうと命に関わるのなら土下座もし、島でも何でも明け渡すとの価値観である。そのことが喩え「国民の」という集団の生存を顧慮してのことであつたにしても、それは奴隷の価値観に他ならない。私は、個々の生よりも大きな普遍的な価値のあることども——例えばある民族集団の歴史や文化——が存在すると頑なに信じていて、私自身について言うと、生きるに値しない生であるなら断固として拒否する構えがあるつもりで生きている。少なくとも、Hobbes 流の解釈に従えば、生と（寿）命だけを至上の価値として、命あってのものだねと考えるアイデアに合意し、それに関する私個人の一切の意志決定と諸権利を契約の上、国家に付託した覚えはない。

ルビコンは過ぎたと申した。

が、まだ何とかなると信じたい。

まだ、日本には地力が残っていて、日本人はなべて優秀、就中、自分の学生達は能力が高い、と想っていたい。そうでないと、来週、飛行機に乗る気が起きない。

若人よ。今の頹落の日本をなんとか誇りの持てる日本に戻してくれ。

そのためには出来ることを目一杯、能力の限界を 100 とするなら、110 か 120 くらいの力を入れて、前を向いて走っていくことだ。

(Sep.25.2010)

月並みではありますがあつという間に 2 ヶ月が過ぎ、明日ここを離れるとの暮夜、本状筆下しております。ご迷惑であつたでしょうに、ご愛読のこと深謝申し上げます。2 ヶ月とはいえ、生活基盤を移して、日常がこうしてごく普通に移ろうようになると、住処にもこのまちにも愛着が湧いてこようと云うもの。今宵最後となればそれなりの感慨があります。

研究室は萩島先生がいれさえすれば安泰で私なんぞいなくたってどつてことないのですが（家人どもにもよくそう言われております——居ると却って迷惑などと）、笑つたのはある学生が「先生がいなくてセイセイしてます…なぜって、心おきなく冷房たけるから…」と言ってよこしたこと。確かに日頃、日本の累積債務 1000 兆円だの、キミらと違って（←ここをわざと強調して）僕は勉強も何も効率的に出来ないの、税金で冷房や暖房たくような阿漕はできないし、天地が覆ろうとも我慢してやると思っているんだ等々と憎まれ口叩いているのですが、せいぜいその手の嫌みをいうだけで、最近の学生には通じないなあと嘆じていたのですけれど、そうでもなかったわけです。欲を言えば、それが通じているのなら、もう一つの嫌み（これは口にはしてないかも知れないが普段の私の行動観ていれば言わずもがなで伝わっている筈）——僕はキミらと違って効率的に勉強が出来ないので、人が 5 時間かけるところ 10 時間、10 時間かけるとこ 20 時間してはじめて対等だと思っている…だから周囲から観て如何にも異常なほど朝早く来る云々も伝わってほしいと

ころですが、どうでしょう。今後をみることにします。

さて、最終稿は僕が本当に書きたかったことであります。

お前は何しに行ってたんだ、税金使って何だとの野次（もしくは野暮）が飛んできそうですが、ご心配召さるな。かかりの大半は、こっちの政府持ちであります。それに私はとうに宗旨替えしておりまして、我が専門は都市気候学でも複雑系物理学でもありません。何か？それは、あれでありますよ。あれ……。そう、——恋愛小説。

Sakura サクラさくら桜（創作）

——子育てが一段落した今、漸く自分一人の時間を楽しむ余剰がもてるようになりました。先週、寒の戻りがあった翌日、ふと思い立って寄ってみたあの場所は当時のまま……遠いところにお住まいの由、はたして覚えておいででしょうか……八幡宮の大銀杏へと続くあの段葛の桜は今が盛りと爛漫の頃でした。

Brown 教授のオフィスを出てきた男が絵ガラス張りの空中廊下からキャンパスの向こうに広がる湖畔の森に目をやると、常緑のユーカリに混じって桜が咲き始めているのに気がついた。夕闇に溶け始めた木立のそこだけが淡く桃色に浮かび上がって見えた。

男は大きな溜息を一つ吐き出した。

誠に残念だが、ファンドの延長はなくなった——君に任用延長の書類を書いて貰う必要はなくなったよ。気の毒そうな表情を作ってはいるが、Brown 教授はあくまでビジネスライクに切り出した。同じプロジェクトで雇用されていたポスドクは男以外に二人いた。一人は教授の抱える別プロジェクトで繋いでもらえることになり、もう一人はシドニー大学にいる教授の友人が引き受けてくれるらしい。放り出されるのは自分だけだが、それは自分以外が白人の豪州人だからだろうと考えるほど男は自分に甘くはない。勿論、それもあるかも知れないが、大きな理由ではないだろう。生き馬の目を抜く先端科学の競争では、人種も、膚の色も、宗教も、性別も、無論、身長も見目容姿も関係ない。優秀な者だけが生き残ることが出来る健全な淘汰機構から逸脱すれば、テニユアーの教授だとて自らの Lebensraum を失ってしまう。四十を目睫に未だポスドクで渡り奉公している男には、小起用さには長けていても自分には確固とした基盤がないことがわかっていた。言葉の壁はハンディだが、他国にいる以上、それを謂ってどうなるものでもない。言葉の不如意も含めて総体的な能力に劣っていた自分が、はじき出されるのは適者生存の原理に照らしても致し方ないことだと納得するしかないのだ。無論、落胆は大きい。

桜を向こうに、男は自らの落魄の境遇を静かに眺めていた。そうする他なかったのだ。

春宵一刻のできごとであった。

翌朝、男は湖畔に広がる Commonwealth Park に行ってみた。暁闇から抜け出したばかりの朝陽はまだ弱々しい。鐘塔(カリオン)から落ちる紫色の翳は湖上に伸び、その先には Capital Hill が朝陽をまともに浴びて綺羅を放っている。

日本を出、爾来十年、この地に淹留して二年がたった。ここらが潮時なのかも知れない。と云って還るにしても手繰るべき糸はとうに切れている。世捨て人ではないが、徒人(あだしびと)ではあった。

ふと見上げると、頭上には爛漫の桜があった。日本の桜もきれいだが、人々に眺め倒されることで可憐な美しさを吸い取られてはいまいか。ここの桜は、人に特に愛でられるわけでもなく、愛でるほど人居の多くないこの大陸で、こうして毎年ひっそりと花をひろげでは人知れず散っていく。そのけなげな美しさはたれのためか。

半年前の夏の終わりに、二十年前の思い女から、突然、手紙が来た。人生半ばを過ぎ、余裕を弄びかねた優者が劣位にある者に下し与える憐憫の情かと訝ったが、今更絶えて音信の無かった敗者を捜し出してまで冗弁を尽くすほど閑があるとは思えない。何かの転機が彼女にそうさせたのだろうが、それが一体何なのか理路は不分明だった。が、一つだけ視えることがあった。桜の可憐ではかない美しさだった。その人の面影そのものだったのかも知れない。

「どうして、政府機関以外何にもないこのまちにわざわざ来たいなんて言うのか、随分へんなこと言うなあと思ったんだよ」

Sydney 駐在の一人息子のもとに遊びにやってきた女は、無理を言って一日だけ寄り道をした。

「この桜をどうしても——死ぬ前に、是非にでもこの目で見ておきたかったのよ」
そう呟く母親の横貌を見ながら、息子は爛漫の桜に若い頃の母の立姿を重ね合わせていた。

——それにしても、その人にとっては迷惑だったんじゃないの？母さんの気まぐれなよろめきに付き合わされて——息子の半畳めいた冗談に、女は臍長けた微笑で応じる。

前夜の驟雨が嘘だったように、穏やかな春の陽射しに湖畔がまどろんでいる。湖をわたってきた微風が枝を揺らすと、あたりは揺蕩(たゆと)うばかりの桜吹雪になった。花卉は午後の斜陽にはじけ、刻々、光の雪片に化(な)って降り注ぐ。その中に佇立する和装の母がときに隠れ、そして顕れ、背景の湖に溶けると暈光(うんこう)となった。目耀(まがよ)う綺羅の fragments。ベンチの老夫婦が静かな嘆声を上げている。幽(かそ)けき落花の美は桜でなく母のことなのだ——彼らの嘆息もそれを惜しんでのことだろう——息子は想った。

女は立ち止まると、自ら彩なすその情景を脳裏に刻印するようにそっと目を閉じている。思い残すことはない……母の口からそんな不穏な言葉が出る前に沈黙を埋めなくてはならないと思った。

「母さん……今、その人のこと思い出しているんじゃないの？」

——バカね…そんな筈がないでしょう——母はややあってこたえた。——お父さんのことを思い出していたの…。偽りではない。でも、真実とも違うようにおもった。

「彼岸じゃ一年中、花見なんじゃないのかね」

穏やかな笑みを浮かべた息子は、無粋な謂いに混せて別のことを訊いていたのだ。女は息子の肩にとまった花片をそとつまみ上げ、彼を見て薄く笑った。

講義の最後に渡された花束が幾抱えもあって、貧相な初老の男がそれを脇にかかえながらとぼとぼ歩く様は如何にも滑稽だったろう。すり減ったレンガの凹みや角の欠け具合まで足の裏が覚えている。通い慣れたこの煉瓦の遊歩道も今日が最後になる。

男が立ち止まって、ふと見上げると、赤門脇の桜が満開だった。

今日の桜は一段と美しかった。

濃（だ）みた美しさではない。薄く愁いを含んだ美は、その場で散っていく儂さと隣り合わせのものだった。自分はその鬩ぎ合いのあやうい隙間を衝いて、何とかここまで泳ぎ渡ってきた。それでよかったのか。もうこの桜を見ることもない。

来し方にあった幾たびかの曲がり角には、いつも桜があったように思う。星霜幾十年、桜はいずれも時間の彼方に散っていった。儂いはずが、いつまでも色褪せぬとは稀代なことではあった。

記憶は濾過されると甘い感傷だけが残滓になるのだ。それもよい。段葛の、Lake Burley Griffin の、女の野辺の送りの、そしてこの一期の桜も決して忘れることはないだろう。

男はゆっくりとまた歩き始めた。

(Sep.27.2010)

跋

帰ってくれば元の日常に埋め込まれる。

オーストラリア英語特有の語彙かと思うが、I am snowed under this week. と言えば、今週は（天から雪が降ってくるように）仕事に追われた、との意味になる。私も何の違和もなく帰国翌日から講義で伊都キャンパスへと通い、あれこれの書類に追われている。帰国寸前にあった尖閣事件で、国辱められれば士死すとの痛憤も周りが皆日本人の環境に戻ってくると鈍麻してしまうようだ。が、あの人達が屠腹して国民に謝するわけでもなく、彼らも皆もわりに平然としているのには、どうしたって割り切れなさが残る。やはりこの国は滅んでいくしかないのだろうか。

オーストラリアでは、一般メディアはくだんの事件をほとんど伝えなかった。ジャップとシナ人のいざこざなんて関心ないのだ。US TODAY だったか、同じように中国の傍若無人な振る舞いにほとんど手を焼いているインドでは、やつらの振る舞いは殆ど狂気の沙汰だ…それにしても全く無抵抗で完敗した日本外交の情けなさよ、と報じられているとあった。そんなことより今、豪州で持ちきりなのは、つい先日、デリーで開幕した Commonwealth Game (英連邦の国々が4年に1度集まって開催しているスポーツの祭典)に関連した話題…陸続と選手団が来るなか選手村は未完成だの、会場近くの橋が落ちただの、警備はお粗末で一部の選手が身の危険を感じて帰国しちまうだの、町中で白昼テロが起きるだの、そもそもインドはスポーツの祭典を開催出来るほどの近代国家としての統治能力を具えているのかと言った論だった。で、我が日本はそのインドにも、こりゃ駄目だ、とあきれられているわけだ。無論、多くの日本人が、海外からそんな風に観られていることなど知らない。だから、あれだけ国を辱められて唾然とするならまだしも、平然としていられるのだろう。外界を知らぬ太平楽にもほどがあるというもの。

帰国して、今回の在豪が実に実り多き時日であったことを改めて感じているが、このような過ごし方が許されるのは私の世代で最後になるかもしれないと、かつては漠とした不安、現下は明らかな落魄の中で感じている。せめて私が死ぬる前に 51 番目の州ないしは倭人自治区（このフレーズ何度出てきたことか…）になる日を見なくて済むようにと今はつま先立つように感じている。

今度の滞在では自分だけの時間が持てたことが何よりであったと思う。一人暮らしは大学院の頃オランダに留学して以来実に 20 年ぶり、元来ものぐさな私にはおさんどんやら洗濯は大いに面倒なのだが、日常の些事（仕事、雑事、家人ども etc）から解放された自由のありがたさを大いに実感できるひとときは何物にも代え難い貴重な日々であった。最終稿のファンタジーは、勿論、虚構だけれど、つくりごとにもそれはそれなりのモチーフが

あって、それを巡って、いささかばかりの心の区画整理ができたことも在豪を楽しくしてくれた一因であったと思う。

いい一刻に恵まれたあと、同じようなときには、向後、二度と邂逅すまいと思うことが、人生の残り持ち時間の方が短くなるにつれ増えている（家人には、そういう人に限って120歳まで生きるなどと言われております・・・）。

最後に、今回の渡航機会を付与してくれた Australian Academy of Science、日本学術振興会に衷心より深謝致します。

いま筑紫野の秋空を見上げながらオーストラリアの空はもっと大きかったなあと思い返しているところでもあります。